

付價

牙九号

都立西方山音韻

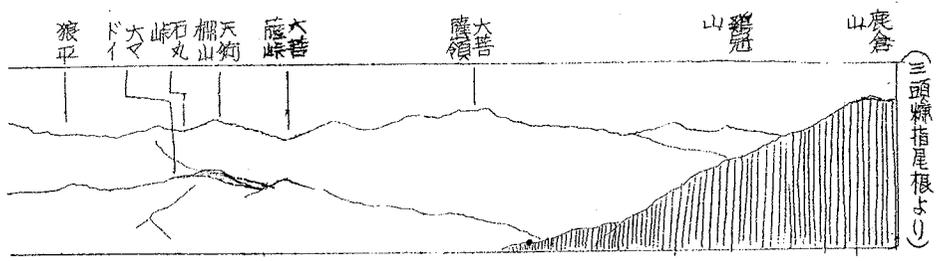
## 失敗

山行には必ず準備が必要である。準備あってこそこの反省があり、反省あってこそこの反省の確実あり、それあってこそこの進歩がある。そこに常に高きを欲するアルビニズムが生れるのである。

我々は、これを良いのだと云う時があつてはならない。反省会に於いてしばしば何れも何れ、反省すべき裏がないと云ふことがある。その段階に於いては満足すべきものであつても、更に一段高いレベルからは尺だらけに窮乏るかも知れないのである。これに気が付かぬ時、既に進歩は中断しているのである。「失敗」と気がついて、更に次の段階への努力に入るとき、大いなる進歩がある。

こゝ云ふ意味で、「成功」は我々にとつて有難くないのである。完全な準備・研究の上に立脚しての、この「成功の意味の失敗」を我々は常に持ちたいものである。換言すれば我々の山行と言ふものは、常に「失敗」であると言はれていたいものである。





部報「彷徨」第九号目次

▽東京都立立西高等学校山岳部 ▲

巻頭言

一年を顧みて、

部長 加藤 鈴夫

四

たわごと

編輯 平沢 勇

山行報告

公式 44回 セツ石山・報告

林 武志

六

反省

加藤 鈴夫

七

セツ石山に於いて

川口 和雄

七

45回 川苔山 報告

反省

福田 繁三郎

十

46回 多摩川南分水嶺遊歩

A 隊 報告

高橋 忠正、高橋 有、阿部 徹

二二

反省

田中 英、加藤 鈴夫、中野 英司

二五

総評

田中 将利

二七

B 隊 報告

梶田 繁三郎

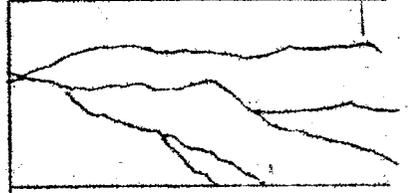
三〇

C 隊 報告

佐藤 忠友

三三

一、中



昭和廿七年度山行計画

公式山行47回

五月三～五日 新入歓迎山行

長瀬背陵縦走 } 歓迎会  
川苔谷百尋滝

公式山行48回

六月八日 勘七潭

公式山行49回  
七月中旬

南ア北岳又は東沢合宿  
(東沢合宿はトサカ尾根横断をかねる)

公式山行50回 (公式山行50回記念)  
八月中旬

穂高廻沢合宿(八日間)

御嶽山行半旅行等  
七月下旬

富士山

公式山行秋山

九月 未 定

十月 奥秩父主脈

十月 トサカ尾根横断

十一月 未 定

公式山行冬山

十二月 スキ一合宿

一月 雲取山合宿

二月 未 定

三月 奥秩父鷲冠尾根・甲武信

以上であるが変更の場合あり。

昭和廿六年度記録家成

とびらカワト  
後

伯人 送川谷洞行

御前山

五色スギ

赤根尾根

志願スギ

報告

報告

報告

報告

報告

平沢 勇

福田 二郎

岡谷 徹

下出 重彦

山口 雄弘

九 九 八

新島 洋子

## 一年間を顧みて

遂に三年生が学校から消えてしまった。この間一年間何をしたら来たか。本当にちねたらしい一年であった。そして最と充実した一年であった。思ひ出せば限りがない。四月。川苔山の集中。新入生を歓迎し部々団結をはかために行ゆれた山行。そして夏事に成功し西高山岳部に新機軸を作り前途に明るい希望をとらした。

五月。水無谷。ふせ返るほどの緑の中り清翠。夏の太陽の下に大きく胸をほつていた。

七月。祖父杖縦走。山岳部発足以来の大山行。総勢三十人。その三十人があの原生林の中をどくどくとして歩き続けた。そして色々な経験と技術と知識を得た。

八月。一、二年だけでハケ岳へ行つた。自分達が計画し地図を見生活して無事帰つて来た。又月。丹澤集中。ムが変わつて不慣れなためか計画に弱気があつた。か皆山の築しを意味して来たことだ。十月。泉水谷。雨の中を皆良かん張つたし良く勿いた。

一月十。セツ石。春山に備えて雲取へ。目的地へは行けなかつたが得たさうはそれにも増して大きかつた。

三月十。奥多摩縦走。あの苦勞、あの聖験、あのファイトをとつてお水は何事と恐れることほない。

私は今前途に対し明るい希望を持つてゐる。あの童顔の一年生がゆんじと押し切りて皆と山へ行き、手をとりお水はひまされ、皆一生果命基礎を身につけてお水としたり。そうしてどうやら一人前に存りとう部の中堅になつてゐる。今では自活意識と皆の心の中に出来て来た。O.Bとすこしはいい合つた。しかし私が好きなのは誰とと同じであり、討論するの熱心だからこそするのではなからうか。

二年生が部を皆が支え盛りだたして受ける。

西高山岳部にと春が来ました。ほら聞いたらゴロンなさい。

はっせりした。生命のいふきが聞えるではありませんか。



スリッパにて非常につらい。しかし雪がない所では非常に快調。登山口で一  
休みの後亦日の事を思ひ出さなから香梅街道を川野へ。そこでバスを米川へ

(林武志)

### 反省

今度の山行はその計画がほとんど二週間前に提出され、急表が一週間前  
あり、当時冬休みであつたために連絡がとれず計画の検討・準備が充分に行  
われなかつたために實際の行動に支障を生じた事であった。当日東京ではか  
なりの雪が降つたため参加者の足が鈍り到着時間を遅うせたことが後の行動  
に大きな影響したことはたしかである。

山平沢の急降が悪化したため途中より同一行動を断念しなければならな  
かつたことは皆に精神的打撃を与えた事であった。これ等の條件に加えて体力  
がなかつたことなどの條件のために雪崩を断せざるを得ない様な状  
態になつたのは残念であつた。計画に含まれない要素が入り込んで来たとす  
ば目的が達せられなくてもしょうがないのではないか？

しかし登山機に対して経験・知識を得られたことはそれにも増して大き  
な収穫であつたと思う。

今後に残された問題としてやはり次の次にまた多過ぎる状態に対する判断  
などの問題があるのではないだろうか。

(C.L 加藤 鈴夫)

### ヒツ石山に登りて

一月六日。確かあの日は雪であつた。行くか行かぬかを一悶着の後、結局  
行く事に決つたのは良かったが、準備が大変であつた。これは最悪の場合の  
事を求めてなかつたために、大部分が用意して未だあつたことが原因であ  
つた。これのために遂に目的地に行けなかつたのは残念であつた。

氷川についたのは十九時。幸い雪がやんでゐた。もちろんバスはない、

仕方なく歩ける前進歩という事になつた。月も出ていない夜道で靴  
とトツカの足を跳めて歩いた。歩ムにつれて水がたぐぐと靴に入して来て  
形容しかたないものになつた。そしてやうやく十時頃には着いてから靴をぬぐ  
のに一苦勞であつた。そして寝る筈になると山川の上でもあつし、毛布を足う  
が、穴はたけを察して取れなかつた。其時は登山とはこんなになつてしまふか  
とも思つたりした。しかし翌日の好天に氣を取りなすべしと決心して  
勇んでとまどはひひなかつたが、たがふ事だ。登山を始めからが大変、自分昇り  
難くなり着ているものもふやふやになる。膝間をぬぐて一歩一歩踏みながら踏  
みしめて歩いた。この時道この一歩が力強く感ぜられたことはあつた。

高くなるにつれて空気が冷える場所ではデントの準備をした時は足が凍りそ  
うだつた。雪道の小さな雪を踏んで氷に当つて降りた所は大抵すたがぬ靴が靴に  
次の御荷物も小屋に降りやせの雪取は無理だと云う事になり七ツ石に登ら  
た。道標の数字の段々少なくなつて行くの感じがしなかつた。頂上までい  
誰かが叫んだ。この音を聞くや否や皆足元も忘れて走り出た。頂上のす  
まはに山の名の通り大きな石がセツツ有つた。頂上に立つてすまはについたの  
は頂上から雪取に通ずる一定下で又昇る道であつた。その道には靴の跡と思  
の足あととかが二まぶさ縋りていた。又自分を這する所に立すはなつてい  
る大雪を履きもすまはに入つた。雪原は見た所起死回生に堪らな山だ  
た。そのまぶさ降りた山は自分を這りていける気がした。

自分も近いうちにギンとあの自分を這りていた雪原山に登ろうと誓いなが  
ら山を下りた。



川口和雄

# 逆川谷溯行 (個人)

〔期 日〕 廿七年一月廿五日(金) 日没時一七五九

〔天 候〕 午前中快晴一五のより風雪

〔ムムバ―〕 田中英、平沢新、地一

〔装 備〕 ビツケル、アイゼン(各3)、ガイル(三十米)ゆらじ、ハンマー、カラビナ、ハーケン(ロック)五、その他

コースタイム 川谷谷入口(0)ー(1)逆川谷出合(0四五一)ー(二)書倉(二)のりー(三)大滝上(0五五)ー(四)大滝下(0五五)ー(五)舟井戸(0五五)ー(六)出合(0七〇)ー(七)橋(0七五)

逆川谷出合... 出合を少し過した処での岩壁道を下る。本谷へ降りたら対岸へつり綱を捲りて倒木つたてに岩壁に取つく。逆川へ降りる時は充水不足を聞きゆめぬてからでないと下つてしまつてから遅退極まる事があるから注意はねばならない。

〇下(十二米) 左岸は兎野な蒼木となつていて頂登は非常な技術も要する。右壁よりつり綱を中上段バンドをカツティングしてトラバースする。

〇下(三米) 岩の風面によつて全貌不明。右岸を捲く。この上で食事。この間の各川沢は氷壁となり谷にぞんぞん下つてはたえず落ちる石にみまわられた。

〇下(三米) 遠望。二の上で左岸よりボウヤウス氷。〇下(九米) 三段より成る。下二段は平尺。蒼木のヌツツ、フカットにより中段へ至る。上段はナメ極状となり水線近く右岸出合までだがハーケン二本必要。冬なのでえんりとした。捲くには左岸まるとる少々腕力が必要とする。

二の上小滝多数あり。右よりデスリ。

〇下(十三米) 渡次郎沢下りに似ている。左岸が可能だが岩口近く垂直此所がめんどうである。ビツケルがじやまでゆめ右岸を越す。このすく上に橋(大滝)がある。

〇下(〇米) 右を突破。左右面又ともすい。

〇下(二米) 舟井戸と云うべき五米、三米の小滝を前に全壁があつく給水。踏み板いた木下に巻いた綱。滝の手前に左岸にルンバが一歩入つている蒼木がはりの地面を白そうな壁を描つてゐる。尾根へ出てから大変らしい。大滝を捲くには三米の滝の手前より右岸に降りてアンサウンドな岩ま約五十米。相当リアルハイトを登攀される。

〇滝場より脱するヒトタンに腰までのラツセルとなる。沢身にとつて進めは舟井戸の最低部が右に出、一〇米程の近さまで次が上つて水割つて。氷壁は大部分雪が溶けた。化したものらしく塊状軟弱であった。アイゼンは病的に利く。氷加水あかの上に付いてはため岩からの脱落を心配する事。深雪にはワカンが役に立つ。



以上平沢 啓

〔序 記〕 川谷谷本支流に数回入つたが、いづれもすまぬでいづれも谷の連続である。殊に程、火打石のせれを考へると溯行に不利ぬ田中冬山の初めでの平沢とのパー、テは非常に心配したが、意外に明るく谷でゴルシシが全くなかつた事、大いに樂であつたが、故をなほはもう一歩の体力である。無氷期は下(五、下(七)の頂登(二)のさけは初心者でも解める沢である。川谷特有のゴルシシと益はない。

冬期(一月)にひかへてこの山行故身の大幸まつた山行であつた。(田中英 利)

# 個人山行 御前山

期日 十二月二十八日

バーテイ 稲田

コース 御岳駅—御前山—大岳山—御前山—新巻—永川

生取ではじめての登山行、少々心配しながらも青楓湖に乘ると川苔山へ行くと言う丘川高校の部長と一緒に、御岳駅から御前山までは、ひつとりと静かであった。御岳神社の左側を捲いて尾根道に出る。七代の薙でもみようと思うが、時雨に予備がないこと、単独行であることが、気にかゝつたため、じかに大岳へとりついた。大岳山の登りは、少しへびつたが、馬力をかけて一気にのぼる。山頂につくと自然と腹がすいて来て、急いで飯盒のふたをあける。太陽も丁度南中している株だ。一人だまるといふか、あまじうまくない。大岳から大々ワまひの平和な道を急ぐといふのまにか、驚かつかしい大々ワへ出る。此所を一休みする。単独行し又悪くないと思ひながら、モヤラメルをテックからとりだし火を焚く。御前山の前期の鞍部につく。右側におき置がある。とかイドヌツク書かれてある如く、巻みちがあつたのでさうとくまはじめて、やつとわいこと尾根道に出る。この巻を行くと、だんだんスツシユがひびくようになって、先ほど見るほど下にぐつと下つていく。これいかにと左手を握ると御前山がある。尾根一本向直つてしまつたと感ずき、御前山の防火線が登りなほす。もう一巻尾根道をこみかると、やはり巻道は防火線のある小谷尾根道まで、御前山の縦走路の尾根まではついていない。御前山はみはらしのきかないつまらぬ山と聞いていたが、折にその通りなので、いよいよその頂を辞し鞍部へもどる。此所から新巻までの道はガツチリ凍りついてよくすべる、持つて来たア

イゼンをつけて快適に下る。途中一本折つてしまひ今見る株は三本風になつてしまつた。  
 坂ノ 福田玄二郎  
 雪は四本此アイゼン取換については、昨年一月、雪取山の下降で田中英のアイゼンが全滅がつてしまつた事がある。

## 個人山行 五色スキー

期日 一月六日—七日

P 一D 阿谷 他一名

雪量が少ない今年に列車に乗込むスキー客も少ない。途中隣りに座るおじいさんにおもしろい昔話を聞きたながら板屋でも通道する。みぞれの降る中を板屋駅におり立つ。

土地の人のうわさによると、今連で南宮海峡をうめたから海流の關係で東北は雪が少なくなつたと言ふことで大変喜んでゐる。錢々スキー客には大変わいわいな話である。鐵路がたいに二、三十分違ふと左に五色への道標を見出す。五色橋を渡ると急な坂道になる。雪も一米近くありスキーをつけて登ることも出来ない。駅より一時雨半のアルバイトで着く。このスキー場はまったくちやうほけな所である。校舎の棟は今夜の宿五色温泉はスキー場の上に連なつてゐる。このスキー場は百貨店の屋上のワラスキー場と変わる所もなく全くつまらない所である。

七ツ石山の峠のこと、冬山が初めてと云う川、さびた八本此アイゼンを使つた。と種々としてヤスリをかけたまひは良かったが、さあ感と云う難段になつては、そのドキ／＼する株がたまらぬ。痛む足をなマン纏する事しきりであつたが、遂に尻弁へ指つただけで帰家した。日くハチ何のためにヤスリをかきつけたらう。

# オケ田 ゴンザス尾根

二月三日 (日) 晴

朝 八時 福田 山開谷 田中 山 戸田 早尾 佐藤 斎藤 下出

茶

コース 新川(白丸谷)ニシ 日向入口(丸四〇) トンネル上(二〇二) 一〇四五 一ノクマ山(二〇二) 鞍部中(二二二) 一〇五五 一本佐田山(二二〇) 一三五五 一ノクマ高山(二四三) 一六〇七(二二〇) 一(二二二) 一舟井戸(三二〇) 一川来山(三四〇) 一四二二 一鳩巢(五五五)

ゴンザスへの入口を折々見つけ出す。途中測量員の赤旗を二組ばかり見  
る。山の神の所ではへ曲るといって急な登り地帯を見る。想像したよりは  
大分苦しかった。日向から一時間も歩いたというのにまだ足下には氷川中学  
があり、ラシオ、檜の音などがガンガン聞え、ビルの屋上から町を眺めては  
のどかいだ。急な登りを降り気があるため、突然戸田が足を  
滑らせてしまった。音響線リトニネルとたろう。

田中さんは自分の荷を分解し、戸田のリュックをかつぐ。三十分程休けい  
つぱな元気に残り、戸田も大層よく行った様だ。関を、戸田、下出、早尾、佐  
藤、斎藤、茶、田中、福田、のオケ田へ行く。親にきずをうけた。十  
この辺は踏跡も不明瞭で、ブーツもひどく滑る。親にきずをうけた。十  
米を越えようと北側には、雪もかきり出さず、今までの登山の疲れ感ばかり  
に春山の緑を感じている。クママ山につく。斎藤が足がだるいといひ出  
し、これを下出が持つ。下出は二のパーティーの元気をさそ、お蔭まいり  
の様だと口づけた。下出は全くとまらぬ。十二時に近づく。下出は  
下がつた車はが履かへつて力が出なくなつたといひ、一本佐田山を登りし  
ながら申食をこつた。一本佐田山頂は雪にみ、はれり。上に岩根常太郎の記

念願が空き出ている。記念撮影をする。雪の中を走り下つた。  
ゴッ高も過ぎ次のピークまで道は二つに分れ一つは沢へ下るものかたなり急な  
下りである。杖は左の道をとり川来山の暗緑色の山腹を踏みながら雪の中  
を歩こう様下つていこうと進んだ。

川来へは暗緑色を穿つて音が得た。ヒキニリに説明され又急な登りた。ゴッ高  
の登りは雪が多い。木々の安眠が止る。舟井戸が止つた。福田は二ノクマ  
カンをばく練習をして来た。山頂は大雪。セツ石方面が眺められたが寒さ  
はかたなりさびしく金物に手をふれるとほりつた。湯気の出る熱さう存つめ  
たい水もコッフェル。雪から作りかたが、時間の体力の関係で赤旗を  
下る事もあきらめ、木次上ることに決定する。途中ウサギのワナをみつけ  
舟井戸がアイゼンをつける。暗くなる道を雪の上、土の上、氷の上、石の上  
何人でもかまげ、すメチマメチマにかかりつた。

大根の山の神の前でアイゼンをばつた。杖は間もなく鳩巢の壁についた。  
右記 (関谷記)

冬の奥多摩に一年主体として行く。徳島の檜嶺地が水された。  
御岳ト大根ト御前、ゴンザス尾根ト川来山ト赤松尾根等。二の内(加  
藤)の遠征による。ゴンザス尾根の降り急な登り。山にまよつて登る。せ  
れを赤松尾根を川来山から下るとして登った。二の赤松尾根は御前山村田  
が歩いたことのあるコースであるが、ゴンザス尾根はだれもあつたこと  
いもつて又ガイドブックの類にも出ていない。ためとメ状態がわからず、予  
のタイムを作るのに苦労した。二の苦勞に甘かかからず、二の山行は想像以上  
の多量の直登と遠征、パテリックス等のため時間を普通の状態のそれ以上  
に喰ひ、赤松尾根の終走は断念せねばならず、見事失敗に終わった。二の山



# 公式山行第四六回 多摩川南陵縦走

## 一 概要・目的

西高山岳部がこの二三年間基礎確立以奉専ら級数的に發展して来る事は数  
目の一致するところである。又部の主眼がパーティシップと生活技術に向けら  
れてゐると云ふ事も今を放す因となつた事大である。云わねばならぬ、  
しかるに部の主力たる三年の卒業を見れば貧弱が二年にかわつて、最近盛  
一年部員が一九五二年度の主力にあらねばならぬ。単に自己の山行のみが  
ならず、次代の一年をかきりて行かねばならぬ立場にあるわけである。

一般に中学には登山と云ふスポーツ団体はあり。新人はむしろ全くの白紙で  
ある。それが今年のみに限らず、六三三制が廃止されぬかぎり、入部以來わずか  
一ヶ月の二年部員が部の中絶せる山行を行ひ指揮して行かねばならぬ。その  
様な條件の中に一年部員の夏山縦走参加はわずか二名と云う結果が付随して  
いる。これによつて次代主力となる二年の甲が乏しいやうな状態にしてい  
るのである。勿論最後は白紙に等しい。新人を迎へる四日迄に此筋を何と  
せねばならぬ。さう考へ出したのが八月十一日の末であったと思ふ。

専らメンバースキップ・リーダーシップの強化の要ある事。(1)夏季生活技術と習  
得する事にある。これには合宿以外にはかりが、三十名に迫り然るに準備に備  
らばざるが、スキーにはコースと金が、最後に残つたのが、夏  
期の縦走で、これより外に持物はなかつたのである。

## 二 計画ならびにその経過

初頭し合(CLC)によつて三月末の興芳彦縦走案が組まれた。

浅川——高尾山——海員校の——三頭山——日見山——大岳山——戸  
岳 二山は山をきく見事な遊樂場にして、遊樂度を失つたため、此行は長期の準備

備トレーニングを必要とするメンバーアップの強化の意味で、全く未知のヤブ庭  
根を有するや二案を作る事にした。又陵線の関係から全部天幕(東京テント  
より借用)を使用するものとした。

蘆山——丸川峠——クニウチゴテニタル(1)——嶺——大菩薩峠——石丸峠  
——牛ノ根——大がら(2)——奈良倉山——ツル峠——三頭山(3)——大岳山——  
一日の出山(4)——香梅 最終日は一般生徒の参加によるハイキングとした  
が右に大がら峠にて合前大岳山とクニウチゴテニタルと唐松と改正された。  
十二月中旬に田中將利がCLCに決定され直ちに隊員數十名としての研究会に  
入り、実行に入った。

資料不足のため、年の木の分水嶺備蓄並びに予備隊員募集約百二十員中約廿五員を  
C2(大がら)予定地点にあがらざる事があり、三隊を出して施行した。  
一月下旬に研究会の研究合及準備会が急行停止、縦走隊員の確定により十六人  
今の全計画が、定於一應三年は千を引き、二年に計画通りにする準備を行はし  
めた。

- 総指揮 加藤(八月十日より) 岩田(臨時)
- 監督 福田(香梅) 岡谷(川村) 多田(金橋)
- 金橋 林(佐藤) 下出(燃料係 松崎)
- 燃料係 松崎
- 予備 倉塚

トレーニングは二三年担当の左へ行はれなかった。三坪のこの間、タツ子等  
三月七日卒業の日になつて、準備が全盤出来て、おりの支那した。その上十  
三日の準備会に至り、大量の子供が、出来参加者の半数が三年(新OB)となつ

てしまった。これにより生ずる種々の條件からCが起つて一時計画 （参考） を言いたが、熱心な方もあるため最新人の考加を認め、P、T、E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、O、P、Q、R、S、T、U、V、W、X、Y、Z、AA、AB、AC、AD、AE、AF、AG、AH、AI、AJ、AK、AL、AM、AN、AO、AP、AQ、AR、AS、AT、AU、AV、AW、AX、AY、AZ、BA、BB、BC、BD、BE、BF、BG、BH、BI、BJ、BK、BL、BM、BN、BO、BP、BQ、BR、BS、BT、BU、BV、BW、BX、BY、BZ、CA、CB、CC、CD、CE、CF、CG、CH、CI、CJ、CK、CL、CM、CN、CO、CP、CQ、CR、CS、CT、CU、CV、CW、CX、CY、CZ、DA、DB、DC、DD、DE、DF、DG、DH、DI、DJ、DK、DL、DM、DN、DO、DP、DQ、DR、DS、DT、DU、DV、DW、DX、DY、DZ、EA、EB、EC、ED、EE、EF、EG、EH、EI、EJ、EK、EL、EM、EN、EO、EP、EQ、ER、ES、ET、EU、EV、EW、EX、EY、EZ、FA、FB、FC、FD、FE、FF、FG、FH、FI、FJ、FK、FL、FM、FN、FO、FP、FQ、FR、FS、FT、FU、FV、FW、FX、FY、FZ、GA、GB、GC、GD、GE、GF、GG、GH、GI、GJ、GK、GL、GM、GN、GO、GP、GQ、GR、GS、GT、GU、GV、GW、GX、GY、GZ、HA、HB、HC、HD、HE、HF、HG、HH、HI、HJ、HK、HL、HM、HN、HO、HP、HQ、HR、HS、HT、HU、HV、HW、HX、HY、HZ、IA、IB、IC、ID、IE、IF、IG、IH、II、IJ、IK、IL、IM、IN、IO、IP、IQ、IR、IS、IT、IU、IV、IW、IX、IY、IZ、JA、JB、JC、JD、JE、JF、JG、JH、JI、JJ、JK、JL、JM、JN、JO、JP、JQ、JR、JS、JT、JU、JV、JW、JX、JY、JZ、KA、KB、KC、KD、KE、KF、KG、KH、KI、KJ、KK、KL、KM、KN、KO、KP、KQ、KR、KS、KT、KU、KV、KW、KX、KY、KZ、LA、LB、LC、LD、LE、LF、LG、LH、LI、LJ、LK、LL、LM、LN、LO、LP、LQ、LR、LS、LT、LU、LV、LW、LX、LY、LZ、MA、MB、MC、MD、ME、MF、MG、MH、MI、MJ、MK、ML、MM、MN、MO、MP、MQ、MR、MS、MT、MU、MV、MW、MX、MY、MZ、NA、NB、NC、ND、NE、NF、NG、NH、NI、NJ、NK、NL、NM、NO、NP、NQ、NR、NS、NT、NU、NV、NW、NX、NY、NZ、OA、OB、OC、OD、OE、OF、OG、OH、OI、OJ、OK、OL、OM、ON、OO、OP、OQ、OR、OS、OT、OU、OV、OW、OX、OY、OZ、PA、PB、PC、PD、PE、PF、PG、PH、PI、PJ、PK、PL、PM、PN、PO、PP、PQ、PR、PS、PT、PU、PV、PW、PX、PY、PZ、QA、QB、QC、QD、QE、QF、QG、QH、QI、QJ、QK、QL、QM、QN、QO、QP、QQ、QR、QS、QT、QU、QV、QW、QX、QY、QZ、RA、RB、RC、RD、RE、RF、RG、RH、RI、RJ、RK、RL、RM、RN、RO、RP、RQ、RR、RS、RT、RU、RV、RW、RX、RY、RZ、SA、SB、SC、SD、SE、SF、SG、SH、SI、SJ、SK、SL、SM、SN、SO、SP、SQ、SR、SS、ST、SU、SV、SW、SX、SY、SZ、TA、TB、TC、TD、TE、TF、TG、TH、TI、TJ、TK、TL、TM、TN、TO、TP、TQ、TR、TS、TT、TU、TV、TW、TX、TY、TZ、UA、UB、UC、UD、UE、UF、UG、UH、UI、UJ、UK、UL、UM、UN、UO、UP、UQ、UR、US、UT、UU、UV、UW、UX、UY、UZ、VA、VB、VC、VD、VE、VF、VG、VH、VI、VJ、VK、VL、VM、VN、VO、VP、VQ、VR、VS、VT、VU、VV、VW、VX、VY、VZ、WA、WB、WC、WD、WE、WF、WG、WH、WI、WJ、WK、WL、WM、WN、WO、WP、WQ、WR、WS、WT、WU、WV、WW、WX、WY、WZ、XA、XB、XC、XD、XE、XF、XG、XH、XI、XJ、XK、XL、XM、XN、XO、XP、XQ、XR、XS、XT、XU、XV、XW、XX、XY、XZ、YA、YB、YC、YD、YE、YF、YG、YH、YI、YJ、YK、YL、YM、YN、YO、YP、YQ、YR、YS、YT、YU、YV、YW、YX、YY、YZ、ZA、ZB、ZC、ZD、ZE、ZF、ZG、ZH、ZI、ZJ、ZK、ZL、ZM、ZN、ZO、ZP、ZQ、ZR、ZS、ZT、ZU、ZV、ZW、ZX、ZY、ZZ、AA、AB、AC、AD、AE、AF、AG、AH、AI、AJ、AK、AL、AM、AN、AO、AP、AQ、AR、AS、AT、AU、AV、AW、AX、AY、AZ、BA、BB、BC、BD、BE、BF、BG、BH、BI、BJ、BK、BL、BM、BN、BO、BP、BQ、BR、BS、BT、BU、BV、BW、BX、BY、BZ、CA、CB、CC、CD、CE、CF、CG、CH、CI、CJ、CK、CL、CM、CN、CO、CP、CQ、CR、CS、CT、CU、CV、CW、CX、CY、CZ、DA、DB、DC、DD、DE、DF、DG、DH、DI、DJ、DK、DL、DM、DN、DO、DP、DQ、DR、DS、DT、DU、DV、DW、DX、DY、DZ、EA、EB、EC、ED、EE、EF、EG、EH、EI、EJ、EK、EL、EM、EN、EO、EP、EQ、ER、ES、ET、EU、EV、EW、EX、EY、EZ、FA、FB、FC、FD、FE、FF、FG、FH、FI、FJ、FK、FL、FM、FN、FO、FP、FQ、FR、FS、FT、FU、FV、FW、FX、FY、FZ、GA、GB、GC、GD、GE、GF、GG、GH、GI、GJ、GK、GL、GM、GN、GO、GP、GQ、GR、GS、GT、GU、GV、GW、GX、GY、GZ、HA、HB、HC、HD、HE、HF、HG、HH、HI、HJ、HK、HL、HM、HN、HO、HP、HQ、HR、HS、HT、HU、HV、HW、HX、HY、HZ、IA、IB、IC、ID、IE、IF、IG、IH、II、IJ、IK、IL、IM、IN、IO、IP、IQ、IR、IS、IT、IU、IV、IW、IX、IY、IZ、JA、JB、JC、JD、JE、JF、JG、JH、JI、JJ、JK、JL、JM、JN、JO、JP、JQ、JR、JS、JT、JU、JV、JW、JX、JY、JZ、KA、KB、KC、KD、KE、KF、KG、KH、KI、KJ、KK、KL、KM、KN、KO、KP、KQ、KR、KS、KT、KU、KV、KW、KX、KY、KZ、LA、LB、LC、LD、LE、LF、LG、LH、LI、LJ、LK、LL、LM、LN、LO、LP、LQ、LR、LS、LT、LU、LV、LW、LX、LY、LZ、MA、MB、MC、MD、ME、MF、MG、MH、MI、MJ、MK、ML、MM、MN、MO、MP、MQ、MR、MS、MT、MU、MV、MW、MX、MY、MZ、NA、NB、NC、ND、NE、NF、NG、NH、NI、NJ、NK、NL、NM、NO、NP、NQ、NR、NS、NT、NU、NV、NW、NX、NY、NZ、OA、OB、OC、OD、OE、OF、OG、OH、OI、OJ、OK、OL、OM、ON、OO、OP、OQ、OR、OS、OT、OU、OV、OW、OX、OY、OZ、PA、PB、PC、PD、PE、PF、PG、PH、PI、PJ、PK、PL、PM、PN、PO、PP、PQ、PR、PS、PT、PU、PV、PW、PX、PY、PZ、QA、QB、QC、QD、QE、QF、QG、QH、QI、QJ、QK、QL、QM、QN、QO、QP、QQ、QR、QS、QT、QU、QV、QW、QX、QY、QZ、RA、RB、RC、RD、RE、RF、RG、RH、RI、RJ、RK、RL、RM、RN、RO、RP、RQ、RR、RS、RT、RU、RV、RW、RX、RY、RZ、SA、SB、SC、SD、SE、SF、SG、SH、SI、SJ、SK、SL、SM、SN、SO、SP、SQ、SR、SS、ST、SU、SV、SW、SX、SY、SZ、TA、TB、TC、TD、TE、TF、TG、TH、TI、TJ、TK、TL、TM、TN、TO、TP、TQ、TR、TS、TT、TU、TV、TW、TX、TY、TZ、UA、UB、UC、UD、UE、UF、UG、UH、UI、UJ、UK、UL、UM、UN、UO、UP、UQ、UR、US、UT、UU、UV、UW、UX、UY、UZ、VA、VB、VC、VD、VE、VF、VG、VH、VI、VJ、VK、VL、VM、VN、VO、VP、VQ、VR、VS、VT、VU、VV、VW、VX、VY、VZ、WA、WB、WC、WD、WE、WF、WG、WH、WI、WJ、WK、WL、WM、WN、WO、WP、WQ、WR、WS、WT、WU、WV、WW、WX、WY、WZ、XA、XB、XC、XD、XE、XF、XG、XH、XI、XJ、XK、XL、XM、XN、XO、XP、XQ、XR、XS、XT、XU、XV、XW、XX、XY、XZ、YA、YB、YC、YD、YE、YF、YG、YH、YI、YJ、YK、YL、YM、YN、YO、YP、YQ、YR、YS、YT、YU、YV、YW、YX、YY、YZ、ZA、ZB、ZC、ZD、ZE、ZF、ZG、ZH、ZI、ZJ、ZK、ZL、ZM、ZN、ZO、ZP、ZQ、ZR、ZS、ZT、ZU、ZV、ZW、ZX、ZY、ZZ

この山の調査会にも出席者は不考者を含まずともC以下二三名と云ふ懸念がある。

出発日の廿日、チヤンヤク迄の縦走隊が出来上つたが、十九日に計画の出発した縦走隊に對しては休養をとるまゝに全くなかつたのである。又同時に林ヶケが、脱落する筈とや、そればかりのまゝCの倉庫に頭を埋めつつ薪焼を焚いたのである。Cの食料も無事だが、左は奇跡で、Cはハタシにや。

三、実行

(1) A隊縦走隊（C隊大ケリ隊）との連絡は廿四日午時の時合同する予定とし、若し午前一時までにA隊大ケリ隊の準備はA隊より停止し独自の行動をとるものとし、B隊連絡に望む。出陣日雨天の場合には隊は独自の山行を行つたものとした。B隊縦走隊（この連絡は必要のないものとしたが、数日前には連絡を要し、A隊の三島田軍出陣の（C）と取れただけで、具体的には打撃を合せて行つてしまふが、た。

(2) A隊の行軍計画は種々の材料より大略面を指示し、その（C）の山行の制限とした。休養日雨天は雨天の場合とし、それ以外の時（降雨）とあつても、行動するものとした。

(3) Cの食料に（給食食料）と（食料）のあった場合には、隊員の準備をとり、準備を焼くとして他の準備をとり、小管入下し、材料を固着の上、緊急食料を

購メソル峠にて合同させるものとした。この峠にて(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) (101) (102) (103) (104) (105) (106) (107) (108) (109) (110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129) (130) (131) (132) (133) (134) (135) (136) (137) (138) (139) (140) (141) (142) (143) (144) (145) (146) (147) (148) (149) (150) (151) (152) (153) (154) (155) (156) (157) (158) (159) (160) (161) (162) (163) (164) (165) (166) (167) (168) (169) (170) (171) (172) (173) (174) (175) (176) (177) (178) (179) (180) (181) (182) (183) (184) (185) (186) (187) (188) (189) (190) (191) (192) (193) (194) (195) (196) (197) (198) (199) (200) (201) (202) (203) (204) (205) (206) (207) (208) (209) (210) (211) (212) (213) (214) (215) (216) (217) (218) (219) (220) (221) (222) (223) (224) (225) (226) (227) (228) (229) (230) (231) (232) (233) (234) (235) (236) (237) (238) (239) (240) (241) (242) (243) (244) (245) (246) (247) (248) (249) (250) (251) (252) (253) (254) (255) (256) (257) (258) (259) (260) (261) (262) (263) (264) (265) (266) (267) (268) (269) (270) (271) (272) (273) (274) (275) (276) (277) (278) (279) (280) (281) (282) (283) (284) (285) (286) (287) (288) (289) (290) (291) (292) (293) (294) (295) (296) (297) (298) (299) (300) (301) (302) (303) (304) (305) (306) (307) (308) (309) (310) (311) (312) (313) (314) (315) (316) (317) (318) (319) (320) (321) (322) (323) (324) (325) (326) (327) (328) (329) (330) (331) (332) (333) (334) (335) (336) (337) (338) (339) (340) (341) (342) (343) (344) (345) (346) (347) (348) (349) (350) (351) (352) (353) (354) (355) (356) (357) (358) (359) (360) (361) (362) (363) (364) (365) (366) (367) (368) (369) (370) (371) (372) (373) (374) (375) (376) (377) (378) (379) (380) (381) (382) (383) (384) (385) (386) (387) (388) (389) (390) (391) (392) (393) (394) (395) (396) (397) (398) (399) (400) (401) (402) (403) (404) (405) (406) (407) (408) (409) (410) (411) (412) (413) (414) (415) (416) (417) (418) (419) (420) (421) (422) (423) (424) (425) (426) (427) (428) (429) (430) (431) (432) (433) (434) (435) (436) (437) (438) (439) (440) (441) (442) (443) (444) (445) (446) (447) (448) (449) (450) (451) (452) (453) (454) (455) (456) (457) (458) (459) (460) (461) (462) (463) (464) (465) (466) (467) (468) (469) (470) (471) (472) (473) (474) (475) (476) (477) (478) (479) (480) (481) (482) (483) (484) (485) (486) (487) (488) (489) (490) (491) (492) (493) (494) (495) (496) (497) (498) (499) (500) (501) (502) (503) (504) (505) (506) (507) (508) (509) (510) (511) (512) (513) (514) (515) (516) (517) (518) (519) (520) (521) (522) (523) (524) (525) (526) (527) (528) (529) (530) (531) (532) (533) (534) (535) (536) (537) (538) (539) (540) (541) (542) (543) (544) (545) (546) (547) (548) (549) (550) (551) (552) (553) (554) (555) (556) (557) (558) (559) (560) (561) (562) (563) (564) (565) (566) (567) (568) (569) (570) (571) (572) (573) (574) (575) (576) (577) (578) (579) (580) (581) (582) (583) (584) (585) (586) (587) (588) (589) (590) (591) (592) (593) (594) (595) (596) (597) (598) (599) (600) (601) (602) (603) (604) (605) (606) (607) (608) (609) (610) (611) (612) (613) (614) (615) (616) (617) (618) (619) (620) (621) (622) (623) (624) (625) (626) (627) (628) (629) (630) (631) (632) (633) (634) (635) (636) (637) (638) (639) (640) (641) (642) (643) (644) (645) (646) (647) (648) (649) (650) (651) (652) (653) (654) (655) (656) (657) (658) (659) (660) (661) (662) (663) (664) (665) (666) (667) (668) (669) (670) (671) (672) (673) (674) (675) (676) (677) (678) (679) (680) (681) (682) (683) (684) (685) (686) (687) (688) (689) (690) (691) (692) (693) (694) (695) (696) (697) (698) (699) (700) (701) (702) (703) (704) (705) (706) (707) (708) (709) (710) (711) (712) (713) (714) (715) (716) (717) (718) (719) (720) (721) (722) (723) (724) (725) (726) (727) (728) (729) (730) (731) (732) (733) (734) (735) (736) (737) (738) (739) (740) (741) (742) (743) (744) (745) (746) (747) (748) (749) (750) (751) (752) (753) (754) (755) (756) (757) (758) (759) (760) (761) (762) (763) (764) (765) (766) (767) (768) (769) (770) (771) (772) (773) (774) (775) (776) (777) (778) (779) (780) (781) (782) (783) (784) (785) (786) (787) (788) (789) (790) (791) (792) (793) (794) (795) (796) (797) (798) (799) (800) (801) (802) (803) (804) (805) (806) (807) (808) (809) (810) (811) (812) (813) (814) (815) (816) (817) (818) (819) (820) (821) (822) (823) (824) (825) (826) (827) (828) (829) (830) (831) (832) (833) (834) (835) (836) (837) (838) (839) (840) (841) (842) (843) (844) (845) (846) (847) (848) (849) (850) (851) (852) (853) (854) (855) (856) (857) (858) (859) (860) (861) (862) (863) (864) (865) (866) (867) (868) (869) (870) (871) (872) (873) (874) (875) (876) (877) (878) (879) (880) (881) (882) (883) (884) (885) (886) (887) (888) (889) (890) (891) (892) (893) (894) (895) (896) (897) (898) (899) (900) (901) (902) (903) (904) (905) (906) (907) (908) (909) (910) (911) (912) (913) (914) (915) (916) (917) (918) (919) (920) (921) (922) (923) (924) (925) (926) (927) (928) (929) (930) (931) (932) (933) (934) (935) (936) (937) (938) (939) (940) (941) (942) (943) (944) (945) (946) (947) (948) (949) (950) (951) (952) (953) (954) (955) (956) (957) (958) (959) (960) (961) (962) (963) (964) (965) (966) (967) (968) (969) (970) (971) (972) (973) (974) (975) (976) (977) (978) (979) (980) (981) (982) (983) (984) (985) (986) (987) (988) (989) (990) (991) (992) (993) (994) (995) (996) (997) (998) (999) (1000)

偵察・荷上行動



才一隊 岩塊の 鈴木 (3) 斎藤の 奥谷の  
目的……(1) 勝線庄との連絡 (2) 牛の根線線の偵察並に標旗を懸置

才二隊 笹田 (3) 加藤 (2) 松山 (2)  
目的……(1) 小管村との連絡 (2) 全重量百三十貫中給せ置、荷上り

才三隊 田中 (3) (1) 平澤 (2) (2) (2)  
目的……永利での連絡 (才一才二隊との)

才一隊 才二隊は今水陵大ケリにて廿四日午前十時合同し、後才二隊との下に文三、才一隊のルートを含む復路するものとす。  
才三隊は才一才二隊水川橋着後合同、出陣にて給食検査を行ふものとす。  
ガツカ品 乾飯(三升)、カンパン(百貫)、ミルク(二ポンド)、炭(一俵)、ガソリン(二ガロン)、炭俵(金)、その他 計廿貫

偵察行動報告

十二月二十四日

才一隊報告 (以首学年は全二一九三年度のものとする)

し 岩根等(三三) 鈴木輝夫(三三) 内林 徹(二) 斎藤忠正(二)

在△...前述の通り。

十二月廿三日と廿四日

裝備... コツフェル、鉈、鋸、アイゼン、ハビ、ラジウス、

バーナー、テント四人用、ガソリン、ガロン、出立手

分イ△ 嵐山(三三五)の四一五、小田原橋の六〇〇、六二〇、神倉

〇七二〇、八三〇、上田川峠の一五、一三五、勝藤社(二一五

〇一三二〇、大菩薩峠(四〇七)一四三〇、天狗淵山(五〇八)一五

一〇一〇(五一五) 食事一七三五

才二日 出立の五五〇石丸峠の八〇〇、牛を根への分岐の八二〇、

カッロへの分岐の八五六、〇九〇、カーカバの〇五五、一〇三五、小菅

村への分岐の〇四〇(甲倉)以下小菅村班と合同、

シトくと降り、大雨に当たって、せつ青梅街道を進む、打続く懸

崖不足のため一行の分途は多分不安だ。吾等附近で塩山駅へ向うバスに

会う。宿相帯に泊めてくれる村の、雪降車についで朝食とする。塩山からの

バスが着て、着くまで、ようやく雨も上った、おぼろげな光景。途中

雪が積り、たゞ判りなかなうと思われ、地味に赤をまっけたつ進む。

伊豆峠が、おぼろげない。上田川峠も近くなつた、が予期に反り、雪は全くな

い。勝藤社で中食とする。二ツリめしにかりリンが、オチて、非常によ

い。勝藤社の人に討取の概要を話し、協力を求める。炭は附近の炭焼小やで

買えばよいと云うことに存り、必要とする。この頃より、白く雪が降り、

の谷天狗岩山に向う。こゝは道がせまく木の根がはり、木もあり、

に歩きにくく、又道の判別もしがたい。雪降車の困難を考へ、うひんぼんに

ホセアける。石丸峠を下に見る、先を急ぐ。且、足踏くつくり、今夜の寒心

地が心配だ。只、おぼろげなので、炭を急ぐのをあきらめ、各のパンをむせし

べる。木もなかり。非常な寒いが炭を急ぐ、先を急ぐ。且、足踏くつくり、

テントをたてる、火の気もなかり、テントからゆり、おぼろげな雪をよ

る。雪降車のため、よくおぼろげな雪が降り、雪降車にしようもの、

布を通してつた、ゆり、おぼろげな雪が降り、雪降車にしようもの、

と降り、更におぼろげな雪が降り、雪降車にしようもの、

分岐は、おぼろげな雪が降り、雪降車にしようもの、

仰る。ようやく小菅村へ来た、おぼろげな雪が降り、雪降車に

上、五分位で、おぼろげな雪が降り、雪降車にしようもの、

雪降車の一人、おぼろげな雪が降り、雪降車にしようもの、

おぼろげな雪が降り、雪降車にしようもの、

三井採記

◆第三隊報告

十二月二十三日―二十四日

し 菅田英次(三) 加藤幹夫(三) 船崎公平(三)

在公目的並ボツ刀島目は前記

タイム 立川の七二〇落―永川の八四〇〇〇ハエの―坂川の九三〇〇〇  
 〇〇―小菅村後場(二)ニニミク〇―四四三―東山小屋(六三〇) 泊  
 前日大あめであつて、植付した十六人分の食料、ホシイロ升、カンペン四  
 貫、白油カン四アをサツクに入れていた。川野もあやけのタバコを賣り出せ  
 する。小菅村の後場に於て初夜をやりすと、三日中旬の積雪の状態は暴風  
 突ひは食糧運搬の場合による對策が困難、その為、つづくの積雪を掛る。可  
 事は村人の心を信頼するのみである。衆の職人荷上のため、朝霧大夕ワへ積雪  
 の地味に度々、木沢に入り、東山小屋の人の好意により、入夫小屋を借用さ  
 せてもらう。泊。

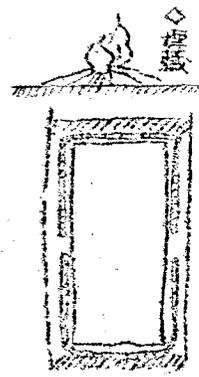
タイム 氷沢の八〇〇―大カワ(一)五〇〇―一五二〇―田元(六一〇)―  
 川池(六四〇)―トス―米川

各自八貫の荷にあつて、木沢から木沢の中間までつめる。盛に雪を三分し、大カワ  
 まで二往復した。荷を多めて運ぶに水場をさがすため、カワの凍結を解除中  
 オ一隊は食事をしているのを、密偵合頭する。オニ隊は六マテイ出(一)〇の  
 隊を、密偵にオニ隊はボツカ品を小屋の内外に五ヶ所を隠してつめる。密偵  
 が乗り、六マテイ、東山小屋の偵察隊、手をつけ、下に下る事にした。バスにて  
 米川へ、オニ隊と米川山荘にて合頭。赤布井約十本、使用。

〇 植付は白油カンの中に入れる事によつて完全をばかした。従来は荷と品を  
 密偵隊と天の樹上にくくりつけたものであるが、此の厚りは密偵が多いため  
 密偵を予想して土中にくる事にした。このためカンペン、密偵隊の積雪  
 密偵の心配が甚だ大となつた。后和ガンの山は、ローを密偵の上、コムテ

を密偵に多く寄つて、完全を期した。

〇 小屋は屋根中破、サイド床共に全くなく、使用不可能に近ひ、大量の降雪には  
 何とかなりせうである。又氷は土登川のヒロヨシ沢、カリパス、ペリッパの源  
 頭のみしか凍結した。往復二十分を要す。又積雪には不可能と感はれる。



上下共、密偵隊、更だどの上、下周囲に  
 積雪を多く十センチ、つめこむ。土を  
 カけた上、密偵隊、密偵隊の積雪を  
 ひひいせんとした。前後は二十セン  
 今くついであつたと思つ。

◆オニ三隊報告

し 田中清英 又次 三

十二月二十四日

タイム 立川(四四〇)―米川(六〇〇)―東山(六一〇)―大入(八〇)―  
 六二五―大入(八〇)―七三〇―一七三〇―一七三〇―米川(八八)―  
 〇

二十三日の夕方に白雲の雪の積雪があげられた事か、つていたので、密偵隊  
 密偵の赤布井約十本を、持ったオニ隊が密偵にお客。殊に密偵隊との連絡が  
 ある。直ちに山荘へ行つたが、密偵隊不在のため、縦走中の水場調査のため、大  
 天の入り入る事にする。大天小屋上のエンテイから上は密水、有雪の場  
 合でも、密偵隊で水をくみに下る事をする。密偵隊は、密のむい、大  
 天ワ峠に着し、テントを張る事になった。密偵隊は、此所は、さるより他ない  
 大天ワ峠で早くも日没、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密  
 四回もかけたハイモンゴースだが、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密  
 密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密  
 密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密偵隊、密



主	副食															主					
	乾飯	カンパン	コッペパン	馬令薯	乾馬令薯	ずりき	とろろこい	ベーコン	バター	ミルク	シヤム	うどん粉	ヤンまあげ	サわかめ	ホウレン草		人参	めざし	かたくり粉	味噌	塩・とろがら
5升2合	4貫600分	1貫	700分	2貫	200分	200分	500分	2ポンド半	1ポンド	200分	200分	45枚	6把	6把	3本	11把	5包	800分	若干	6升	
2に3升荷上げ	2に4貫荷上げ			使用せず、非常食													非常食・全部残る				

入部末の 出行日数	加勢山行(廿六年)公式										負荷			氏名
	川	七ツ	七	大	大	八	七	六	五	四	高	買	買	
川	七ツ	七	大	大	八	七	六	五	四	増	経	量	体	氏名
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	増	験	(%)	重	
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	増	験	(%)	(貫)	氏名
数	数	数	数	数	数	数	数	数	数	増	験	(%)	(貫)	
43	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	8.3	7.3	12.0	田中(新)
41	○			○	○	○	○	○	○	+	7.5	7.2	18.5	田中(新)
16	○		○	○	○	○	○	○	○	+	3.5	5.6	14.0	田中(新)
15	○	○	○							+	5.5	5.4	14.2	田中(新)
8		○		○						+	4.5	5.6	17.0	田中(新)
27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	7.0	6.8	15.0	田中(新)
9	○			○						+	3.5	4.7	12.0	田中(新)
4										+	0	5.0	15.5	田中(新)
29										+	4.5	6.5	14.0	田中(新)
20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	5.5	6.2	12.2	田中(新)
8										+	0	5.5		田中(新)

縦走隊才二百員荷量並びに廿六年度公式山行参加状態

# A 隊行動

才一日 三月廿日 夜行町宿(才)一四五



才二日 蘆山の三二五から三三三(才)に止る。六四〇(才)七四五(才)マシラ  
 才のハニ五〇(才)八四〇(才)マシラ(才)九三〇(才)九九〇(才)一〇〇五〇(才)五〇  
 一〇〇五〇(才)一〇二〇(才)一〇四〇(才)一〇六〇(才)一〇八〇(才)一〇一〇(才)一〇三〇(才)一〇五〇(才)  
 川峠P(一〇〇五)一〇二〇(才)一〇四〇(才)一〇六〇(才)一〇八〇(才)一〇一〇(才)一〇三〇(才)一〇五〇(才)  
 ガンク(才)地味(才)一〇〇五(才)一〇二〇(才)一〇四〇(才)一〇六〇(才)一〇八〇(才)一〇一〇(才)一〇三〇(才)一〇五〇(才)

過去河原が足を印したところある蘆山軍に下車。四五人先心の兵を待合室に

て荷物をまとめてP(一)をトリスに纏勢十一人元氣いつほい水落。空には雲が

またたき明日の天気は雨らしい。夜だ。歩き出しの道で懐中電灯も

無しにひんく／＼夜何す。三十人に分るの体あがりながら進む。途中電燈が

すいたと云う為があるので大部の道が暗い。食料をとる。この頃より半月が

上りはじめ足下／＼なる。暗い。あまり平坦な道が暗くかゝる。雪が少く

た極だ。川田橋を越える。山より寒の気がする。始め、暗さと暗いながら

皆よく／＼と歩く。雪降りの山の中も過ぎ去りすつかり明けた。この頃

に雪が。この頃食をとり、初めは雪が積もつていて、雪の大雪を踏みぬいて

水落。天気は上々。初めは雪が積もつていて、雪の大雪を踏みぬいて

の氷で滑る。川田橋を越える。山より寒の気がする。始め、暗さと暗いながら

皆よく／＼と歩く。雪降りの山の中も過ぎ去りすつかり明けた。この頃

に雪が。この頃食をとり、初めは雪が積もつていて、雪の大雪を踏みぬいて

水落。天気は上々。初めは雪が積もつていて、雪の大雪を踏みぬいて

の氷で滑る。川田橋を越える。山より寒の気がする。始め、暗さと暗いながら

皆よく／＼と歩く。雪降りの山の中も過ぎ去りすつかり明けた。この頃

に雪が。この頃食をとり、初めは雪が積もつていて、雪の大雪を踏みぬいて

水落。天気は上々。初めは雪が積もつていて、雪の大雪を踏みぬいて

の氷で滑る。川田橋を越える。山より寒の気がする。始め、暗さと暗いながら

皆よく／＼と歩く。雪降りの山の中も過ぎ去りすつかり明けた。この頃

に雪が。この頃食をとり、初めは雪が積もつていて、雪の大雪を踏みぬいて

り、必ずしも冷えて歩きにくい。上百川峠にて昼食をとる。C(才)から今日の行動を午後一時迄として明細未だケラリストしているうちに大勢雪をきわめようとする。計画が終る。水行ける所迄行ってC(才)を建設することになる。マシラは晴として腰をたたく。ワカン(才)はマシラがいつたが思うように効果がない。峠からいくつも歩かぬい地味に才一日の目的地にはまだかなりの距離があった。明日に備えて行動を中止しC(才)を建設することになる。直ちに才一隊田中(才)飯塚の両名はP(一)と雪原の傾斜に出発。才二隊才一隊残はC(才)の建設に知り、才三隊は食料と水と氷の持場に付く。必加てま

だ日も流またいうちに夕食のカレーライスも出来、早く床に付く。

食料一六二五 入床一八三〇一八九〇 (舟井)

天候 日中快晴 夜風一入。〇〇〇〇。晴 二〇〇〇。ガス 二三

〇〇から氷合小雪 〇〇〇〇快晴

氷丸 最低マイナスイキ十度(朝の六〇〇)

廿二日 三月廿二日

食料一〇〇〇 夜食 論議〇三〇〇 食料〇三〇〇

C(才)微收(才)六四〇(才)一〇〇〇(才)一〇五〇(才)一〇八〇(才)一〇一〇(才)一〇三〇(才)一〇五〇(才)

一〇一五〇(才)一〇二〇(才)一〇四〇(才)一〇六〇(才)一〇八〇(才)一〇一〇(才)一〇三〇(才)一〇五〇(才)

七〇一三三(才)一〇〇九二(才)一〇〇九三(才)一〇〇九四(才)一〇〇九五(才)一〇〇九六(才)一〇〇九七(才)一〇〇九八(才)

一〇〇九九(才)一〇一〇〇(才)一〇一〇一(才)一〇一〇二(才)一〇一〇三(才)一〇一〇四(才)一〇一〇五(才)一〇一〇六(才)

一〇一〇七(才)一〇一〇八(才)一〇一〇九(才)一〇一一〇(才)一〇一一一(才)一〇一一二(才)一〇一一三(才)一〇一一四(才)

一〇一一五(才)一〇一一六(才)一〇一一七(才)一〇一一八(才)一〇一一九(才)一〇一二〇(才)一〇一二一(才)一〇一二二(才)

一〇一二三(才)一〇一二四(才)一〇一二五(才)一〇一二六(才)一〇一二七(才)一〇一二八(才)一〇一二九(才)一〇一三〇(才)

一〇一三二(才)一〇一三三(才)一〇一三四(才)一〇一三五(才)一〇一三六(才)一〇一三七(才)一〇一三八(才)一〇一三九(才)

一〇一四〇(才)一〇一四一(才)一〇一四二(才)一〇一四三(才)一〇一四四(才)一〇一四五(才)一〇一四六(才)一〇一四七(才)

一〇一四八(才)一〇一四九(才)一〇一五〇(才)一〇一五一(才)一〇一五二(才)一〇一五三(才)一〇一五四(才)一〇一五五(才)

一〇一五六(才)一〇一五七(才)一〇一五八(才)一〇一五九(才)一〇一六〇(才)一〇一六一(才)一〇一六二(才)一〇一六三(才)

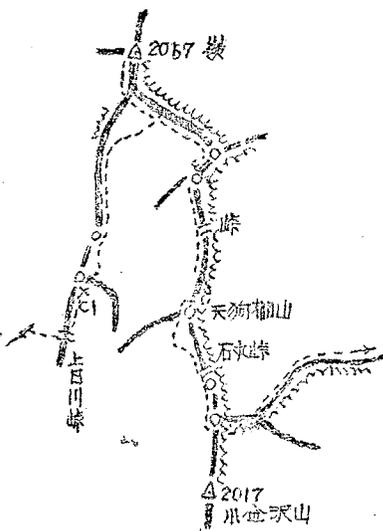
一〇一六四(才)一〇一六五(才)一〇一六六(才)一〇一六七(才)一〇一六八(才)一〇一六九(才)一〇一七〇(才)一〇一七一(才)

一〇一七二(才)一〇一七三(才)一〇一七四(才)一〇一七五(才)一〇一七六(才)一〇一七七(才)一〇一七八(才)一〇一七九(才)

一〇一八〇(才)一〇一八一(才)一〇一八二(才)一〇一八三(才)一〇一八四(才)一〇一八五(才)一〇一八六(才)一〇一八七(才)

ある。クワが二時、た若かりし出落加やぶおくれる。山気味よくウインド  
 クラストしてゆるゆる旗脚に達す。一面の雪氷である。急斜面にアイゼンの  
 ワックケが利く。妙麗まで斜めに盛り荷を置ひこらわりくくと滑り降りて来  
 る。雪氷が一氷以上も登り川側に出ている。積雪七八尺。足根から約五十分  
 にわたつこけるやかな尾根を下つたり上つたりして大菩薩峠迄来た。此所で  
 中食のパンにジュをわけハタキーをあげる。この味は口にたえて突に何とも  
 云えない。ゴツペ(酒)をどこに入つたのかたからないので予備食のカンパ  
 ン(二人半食)ともう。この味は最も味らしい味で云はざる類分と云つ  
 た感である。今までのアルパイイトに対する報酬としては氣に過ぎた存在であ  
 った。天狗山への意気のものすごい雪である。森木峠と巨指して餅餅時に一  
 歩一歩腹までもぐる。時として胸まで完全に没する仕末となった。仕領者の  
 つけた赤い標片も雪で水くぐりたぬるのひびく。雪の間に立ち留まる。右に岩  
 当のアルパイイト上りしり取らぬのでこしがオー隊の前に立ち留まる。右に岩  
 があり左にさけて疵き切つて萎縮。ピッケルストック、鍋、タタキ、そのま  
 横にしての雪派の二時向處に寝に立つた。はつてもかき、もかいては派々  
 運雪の一時間であった。此所から石丸峠へのカヤトの下りも運雪がへソまで  
 来るものゝ遂に三十分向に急降をトツパに交互をレンジした。一担石丸峠の  
 山登に上り介水腹へ直降に下降する。牛ノ根にかつてからは直は急な下りと  
 なりヌスくと腹までもぐり赤行はながく、足に足に足に足に足に足に足に足に  
 肩は痛い込んで非難たきにくく足に大運石の痛さはいたつた。積  
 雪深く意外な時間を送つ。雪降は一町。米町まであり、疲れること甚  
 しい。たゞ尾根つたりにオマドク山のガレをのぞきながら勢々と大タワへ向  
 つて行く。五時非雪をさとり元氣をつける。途中日はとつぱりと輝いてま  
 った。もう赤行を急送する事は困難の、たゞつたに牛ノ根の峻険を急降して

急降して、遂に。雪のあかりを照らす。電灯なしでも歩いて行つたが終いに  
 枯木を踏まわちかえて平テを気分をうつとほしてしまつた。たゞそれの悲劇であ  
 り灯が必需品となつた。雪野のゆやつとした世は滑りたスリッパから赤る陰氣  
 を一戸穿く身に降らせた。カリバを過ぎ、暗闇の中に腹を失してトツパが土  
 室側に入りかけたが一担停止、足がみさせている前に偵察に出た加藤、音際  
 下出からルート上の礎盤並びに小ヤ谷尾のヨツボが来る。つじ目の出たあつた  
 。声をかけ合ひ、切ましく、がらばつて小ヤへついた。屋敷の一部と柱のみ  
 の小ヤである。オニ隊は直ちに取手にさし、オニ隊は金力でボツカつてあ  
 いた食料を拾ふ。三ヶ所は安全であったことが確認された。山を登する人々  
 の純に、こころがた心に強く、感心させられた次第である。(高橋)



ルート略図 大菩薩峠附近

印は雪庇

夜食三三三〇〇、加藤野ノ根傷にせらぬ。

オニ日 三月廿三日

夜半より降り出した雪は四時半頃までには大雪降り、明けゆく中に極々腹  
 山も北の稜線山も連続に散雪している。此の低い雪根の昨夜雪が降つたのは  
 思われぬ程の上天気である。今朝いきなり積雪中止出巻を云ひわたされ食  
 当のオニ隊の甲野へ一人でおびきを作っている。うまじうまじい雪降の

うちにおちやめたちまち断切水となる。昨夜極寒したニヶ所のホツカ岳まねり出したが此も無事であった。この作業でやゝ出発がおくれたが金倉新雪をいんびの出発が始つた。新雪に屋根の下にテントを張つてよかつたほど誰か云う。大マテイ山まひは樹林中をトツツ五分交たつて進む。平地は腹がキジ打ちの一隊が解放される。キジ打ちの一隊により南斜面には雪が死んどないといふ。新雪は谷間は南斜面を崖に二つにする。峻険より三三〇米下まで南斜面に小径を登りて中野さんがハッパを置いて直登する。おりにまじとの新雪に不安定な降下が始まる。径はかたなりはつきりとしていて雪も昨たの新雪がわづかに誇つてこいるのみであった。二つはヒークを巻く七再び峻上りのり上げこいる。峻上りの雪はすくなくつてこいの上まごもゴリツシヒと共に歩む困難。殊にキスリンタのサイドにあるホールになやま。卒に再び踏跡を登りして田中東さんへの偵察の後、二束をたると幸たし、山油頭の手前の高から降くもしつて予定三十分たると二分の一をいふ。ゴリツシの一方は降りこいるがスツシヨ甚しく断崖田中マ中、偵察もつて峻へハツカする。崖中剣氷にまたがって割目にさまつた雪はけ水を通り旅にたれる。三研も崖に傾こしに中食を許さずカカンパンとペーコンに追加に雪をこがして水をとるも刀だがおぞまものだが金倉新雪が早くとすく。おちか十五分、休みに中食をたげた。ひびき返す雪になやまハながりよう線までと二十分て峻険小や五登尾する。山の神肩の附近をあらう。山人の語にたるとつり北西を登がま、ため大岩壁に面づく、積雪である。このことだつた。雪になやまされるのは三死とカラ名動又天君ひの下降にさける積雪はかたりあるが最険入夫が通してこいるの、ヒラツセルの必要がたははははは。南斜面五尺以上の雪がある。田中東さんより振動した之がたてヒラツセルのベルトが切れた。そ然ると雪もなななり土を踏まると天におり

立ち雪だけの水をがげくのさ。ちつした小雪も止み山沢の急流をさつツクの破損のためおくれた達池さんと中野田中さん加直ひつきますすヒツチをあける。階段上のワサヒ雪もたたり入壁に近づくと人家の台所のおびが鼻につく。山之沢を過ぎ真直をワル峠へじり上げるころはパテついた雪も止み暗くなりかける。大白沢の流雪もへり小滝を見せこける。鵜峠よりニヶ米位手前だつて平原にテントを張る等に決定したはず、食争の用意が及ばずはテントの設置に取りかゝる。テントの支柱を折つたのは倉庫用のテントを張る。つくと食つて荷を軽くしてどのの命令ひたちまう大鍋の底加寛之助で来る。平沢さんの心からのおくりものシルビも所かれる。夕しづりに川の水もめこの山行で一番たつてしキヤンパだつた。昨日の中食の食当は予備食のニギリメシを作るため夜食もつかう。三三〇。凍り下り下火事あり。(附 松)

全日快晴 一六三〇 凍回数取雪のみ

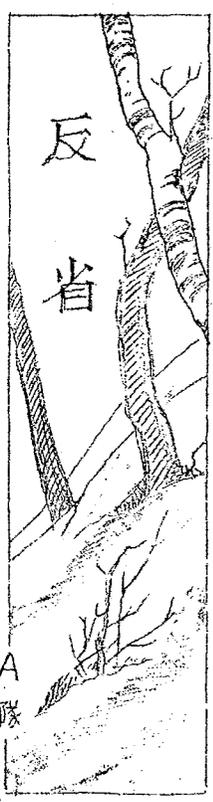
本日 食料の三〇〇 起床の三〇〇 食争の三二〇

〇〇〇の六〇(一 鵜峠の六四五) 小焼山手前Pの八二〇の八三五  
 小焼山の入五の〇八五八(一 休止の九三五) 一西P五  
 〇〇五(一〇一五 中間食 数馬隊の八二〇) (一 三頭曲合) (二  
 五 先登し加藤一〇二六 後二〇四〇) (一 後登脚口峠) (二一五  
 一 二一八) (一 瓦張峠) (三三四) (一 五〇〇の中食) (この間先登隊は月  
 々冠山北にあり金倉新雪に前一時刻を執する) (一日指) (五五〇  
 一 河内) (六四〇) (一 水川解散  
 快晴) (三〇〇) (一 五〇〇) (一 凍回数取雪)

テント火事や村の酔っぱらいの未訪におびやかされた夜もようやく明け六時に予定より二時間おくれて出発。荷馬車の通れる位広いつま先上りの麓を歩み麓峰に着く。味から三頭山への径は千八番峠附近まで長作が炭焼が入っていた。尾根が最初に東へ九十度折れる所で径をさけて隣りに出、フツシユの中を登る。雪は南面にはあまり残りが一歩北面は殆んど氷結している。或時へらしまでもぐり非常に歩きにくい。予定より相当おくれているので救馬隊と連絡すべくピツチをあける。山焼山の一ツ手前のピークでヨツホをあくる。正に入時廿分。隣上を忠実にたじろ。積雪約四尺。やがて三頭西峯の二ツ手前のピークで救馬隊を残して行つた遺骸を発見する。タイムは八時廿分である。救馬隊と約二時間かへだたりがあるのを知つてがっかりする。三頭山で更に一枚の連絡紙を察見した。パテたり腹さこゆしたりしている者が多いため、隊と連絡は不可能と考へ、約二時間の差のあるB隊によつて何らかの連絡がなせるものと判断し、元気の良いもの四名を加藤手直つて只張峰に急派し、御前山登路を歩んでゐるであらうB隊に連絡するために出発させる。後発は荷のせじりの上出発。朝までクラストしてしたのであらうが救馬隊の人々のもぐつていない足跡を自あてい一歩一歩もぐりつゝ進む。重荷の後発の中でも一倍重い下ほど一歩一歩睥まで立ちこける。他人の穴へ落ちればヘソまでもぐる。軽荷の者何れもぐつていない。後発隊が只張峰へついたら既に先発の陣中はいずれ、只張峰までの連合命令を無視している。Cしかかけあつて月夜見山東側をうろくしている先発を尾つけ只張峰へつれもどした。この間約一時間でも先発の陣中は只張峰の位置がわからなかつたのだと云う。軽度の凍傷一、腹痛ニバテレックス数粒をツバクして御岳まで行く事。目の前に入岳を見ていながら明日の行動にさつつかえのない者が四人以下になるのが明らかになつた。目的を達する事はたしかに大争な事であるが動

けぬ様は意気の弱し着を無理させてまで強行する様な備はないものである。田中謙 やつとカンパンの昼食をとる。天候もあやしくなり感々山々が只張峰にたゞかかっているのを見て進走をやめて全隊同一行動をとるべき事として派山する事に決定し只張峰から日指の部落を通り小町内村に下りバスで氷川に出る。ほどほどのものがピツコを引いて唇りキスリンスがこわ川たとまもつた。のせ折れたストツクが、こゝに居る者など相当の惨状を呈していた。

第一日  
 批評の対象となる大きな問題により、めいけ良いわけであるが、私は例によつて、こゝにありいられた事から書いて行く。勿論これは私が山に登る限り強調する事と成るであらう。



最後すべり出ま列車を握手でおくつてくれだ多救馬隊の心通まる友情が先発前の嶺麓備期間にその十介の一でも向けられたいら、縦走隊員に、かゝる肉体的精神的負擔は解消されたいであらう。今後とも山に於ける共同生活のもの、表社会に於いて協同即ち調和の形を多くとも養つていたがたい。度々枚原で行つてゐるテント宿泊も結局は融合をはかる一助をすべきなのである。こゝ各自の性格當時の荷荷量を我々の過去の荷荷量と比べてみるに十一人中八人が彼等多として最初の負擔があり、しかもその中には初めてかつぐ者が二人も居た。重量としては冬山の最々限であつたが、こゝに自づから能力

と雖も、精神的弱みを吐く傾向が見られるのは、二テでも、三テでも、次敵を討  
るよりも、一テの不安とあるであろう。その裏で、心配感得させた一日目特に  
裂石達の行程を難なく通過した事は、結局精神的肉体的闘争に打ち勝ったのであ  
る。歩行中手を掛け合う事は、実に心強、元気があつた腹の底から太い若々し  
い声を出して、同志を励ますものである。バテてりて居る者に口先で吐き出す  
様子が、いかに出る。どうも、どうも、我が山岳部が、固い、固い、これは本年  
度の全行程が、大々美であると思ふ。山容は、等々、逢つた際は、おありつ  
ける様に、「インイワン」を、云う習慣が、欲し。

今日の行動は、小休止を取り過ぎていた。三十分、一回の予定が、二十分以内  
一回の割合で行われていた。ラッセル中は、こまかく、一ミクラ、走出を、迎りまどは、も  
つと、返らすべき行程である。PIによつて、問題として、行動時間と小休止時間の配  
合である。

才一日は、別に行動に、ついで、又個人に、ついで、批判となる、莫は、見受けられ、様  
であるが、最後に、幕営地に、向する、向故に、今日の行動を、こころ、おのつた、か、と、云う、事  
これが、向題となる。結局は、今日の先敵が、縦走を、完了する、事が、出来ぬ、原因と、な  
つたのである。私は、以外、不穩當と、云う、前に、CLは、この山を、世見、ひき、いる、隊員の、状  
態を、知ら、なかつた、のでは、ない、か、と思ふ。しかも、私は、CLの、云う、行動時間、の、限界が、  
ギ向、であつた。ま、こめて、云う、ならば、CLは、變観的、観測に、固定、せ、られ、れ、れ、考、え、る  
範圍、では、二、三日、に、お、つて、自分の、観測の、誤り、を知、つた、のでは、ない、か、と思ふ。  
やう、であ、り、と、す、れば、この、縦走は、出発、前、から、完、遂、出来、な、り、事、に、定、ま、つ、た、も、の  
と、私は、観測、する。少、少、く、とも、CLは、天候、から、見、ても、隊員、の、状態、から、見、ても、ま、ち、二  
時間、半、は、充分、動、か、す、べき、であ、つ、た、ら、う。この、向題、に、向、い、以上、は、私の、見、方、と、し  
て、お、き、た、い。

幕営・食当・偵察は午後二時の太陽に照らされて、記録の迅速さだつた。しか

六、内

し、食後の火たき後かたづけとふるまひ、出るもの、二、三年、た、又、も、  
に、それ、を、やら、ず、に、寝、て、しま、つ、た、事、は、タイム、マン、と、云、う、より、其、程、  
を、全然、身、につ、けて、い、ない、と、し、か、思、わ、れ、な、り、多、り、一、テ、も、  
(PI、田、中、史)

第二日

今日の行動時間が長くなつたのは、主な原因としては、能取山(天狗山)の  
も、ぐる、ベ、タ、等、と、半、の、峰、の、意外、な、積雪、量、並、び、に、雪、庇、にお、び、や、か、さ、れ、た、事、によ、つ  
て、時間、を、と、つ、た、事、が、原因、と、思、つ、て、居、る、と、思、つ、た。天、狗、山、は、冬、にな、つ、て、い、た、よ、め、し  
ま、つ、て、居、ら、ず、荷、物、が、凍、り、の、に、加、え、て、脚、ま、で、も、ぐ、り、苦、勞、し、た。

他の原因としては、出発のおどかつた事(劔、崎、周、半、の、屋、敷)、小、憩、時間、の、長、か、つ  
た、こと、雪、壁、に、足、を、落、さ、ぬ、様、に、氣、を、使、つ、て、精神、的、疲、勞、が、肉、体、的、疲、勞、と、相、当、つ  
て、バ、テ、た、故、であ、つ、た。多、り、一、テ、の、隊員、不、満、一、極、端、の、不、足、符、  
行動、時間、を、長、く、し、て、迄、も、自、助、地、に、行、く、べ、き、か、?  
(加藤、鈴、夫)

第三日

一、第三日目の出発時間のおどかつた事。これは前夜の到着がおどくし、田  
中が明日は、雪、止、り、大、マ、チ、イ、山、の、東、面、偵察、と、云、つ、て、ぬ、て、しま、つ、た。為、に、朝  
食、の、食、当、P、3、が、大、時、に、た、つ、さ、お、こ、し、て、あ、め、て、く、支、仕、に、と、り、か、か、つ、た、し、ま  
つ、て、又、昨、年、未、に、埋、めた、乾、パン、は、一、箱、しか、昨、夜、振、ら、な、かつ、た、ため、残、念、を、講、は、つ、  
た、事、。この、二、突、が、出、発、の、お、く、れ、の、原因、である。

二、三日目の行動尾根は、昨、年、偵察、も、れ、にな、つ、た、所、であ、つ、た、ため、ルート、の、探、取  
に、時間、を、多、く、費、した。更、に、尾、根、の、雪、が、低、い、た、め、に、く、さ、つ、て、お、り、腹、の、深、さ、の、ラ  
ッセルに、全員、が、苦、し、んだ。しか、し、この、日、の、ト、ツ、ス、ラ、ッセル、は、前、日、の、如、く、交  
代、が、スムーズ、に、行、か、ず、一、部、の、者、即、ち、各、パ、ー、ティ、の、リーダー、が、行、進、し、て、お、り、各

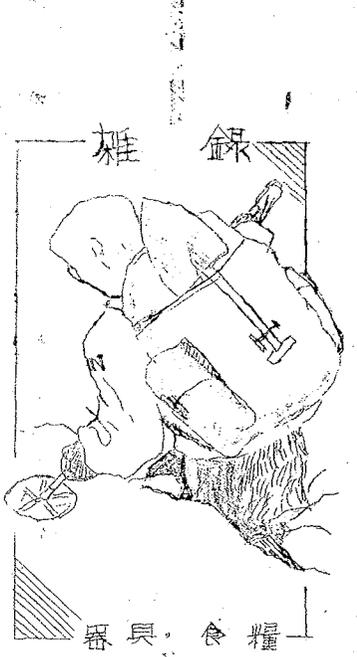
パーティーのしは隊員が燃料を消費して今日のラッセルをする宛迄のまい事を判断した為である。更にこの日自立した事はオ一日、オ二日目に比し各人の持つ荷物の量にかなりの差が出来た事である。つまり多くの荷にあえぐの成各パーティーともして、このしが大部分の行程のトツアシラセラとなつたのである。思い切つてこの日は宿幕し各人の回数を減らす方が長くはなかつたかと思ふのである。

第四日

オ一日の探観、オ二日の苦闘はオ三日に至り停歩多くつがえず高峯となり午四時従徒路を放棄しなければならぬ状態となつた。オ四日日鷹隊を脱した時ですら未だ鞍馬隊に合流出来ず、御岳山まで到達すると云うことしの總体助見解を隊員が信じていたのである。地図を弄ひてくれ、隊員はオ四日目の行程を全山の山行から体験して三頭から御岳又は日和田迄歩けると思つていたのである。カ論ぞのファイ上を讀みたい。

凡そ峠を知らぬ先路隊員隊が、どこまで戻されしかもどこで縦走を打切つたか始めは絶対さげ得べきであった。即ちどの原因である四日目の縦走を難苦と闘いしかも今日は鞍馬隊水川隊と連絡をとるとことしは断言した。隊員としては只張隊のハヴァークして続行せんかとして向ひれど始めどしか云ふていひがあたりまよと云つて後にくらひであらう。又燃料を切らした件は使わないうガソリンをわざとくぼつてまで拵かえら水とも上日川峠、大多和、小菅村で炭を求めておくべきであつた。

鷹隊が炭無しで送つた事で直面する事態を考へず希望を里に向けていたのであらうか。鷹隊から脱落したいと云うものも多し事だし三頭の頂へ後隊を作らねばならぬ状態となつた時、直ちにC4地帯を指命して救急隊に対しては連絡隊を作る事が最善の處置であつた事と思ふ。又二三年隊員も三日ぐらひの滞



○ 燃料を食糧上に用いて

心配しては食糧カンパン、炭の含炭度の問題は、不可思議な程何の変化も見られず、湿気は殆んどなく決的に使用出来た。方法は前述の通りで他パーティーにもおすすめた。餅については実験用として十一月から用意してあつたのを心なき部員が目の中におさまつてしまつたのは研究心盛んなるものとして知らうんでもあまりある事であつた。尚湿度に使用した炭俄も乾燥してはマツトとして充分な効果を上り得たと思ふが、たゞ一つガソリンが引火しにくく、なつては事、まごが受質とは思はれぬ調査の要あり拵ちかえつた(ガロン)

○ 赤布片の偵察隊

長さ一尺余巾二寸及三寸の赤布片で隊員用として偵察隊が地上二米につけてくれたものであるが(約五十本使用)滑す水サレであつたり埋つていたりして発見しにくく、残置の位置がわからぬため方向判定に苦心した事も一重や二重ではない。又牛の糞の検出だ、広い森林隊ではガスや降雪の場合には視界内に雪をまみしめて位置の認められる検出距離と方法をえらうべきである。ラッセルして雪の中から出る場合もあり、五十数本のうち約半数しか発見出来なかつた。

○ 器具

は当り前の覚悟を思つて体力に余裕を持たねばならない。この英Cしが敵員の体力不足による縦走中止(表面の宿思)となつた事はトレーニン不足と共に実に実に残念な事であつた。

C3に於けるP3のテント火事はランタンの過熱である。そして頭の過熱である。就中中のローソクは殆どの燃焼がなかつた筈である。

尻張り峠の下りは命令もないのに腹が立つ様な徒競走であつた。裏山でも痛裂に言はれた事ではないか。

最後に四月の計画にもかゝらず此迄直前アイマイな返事で行けない「荷が無い」と言ひ出す態度は最後に益反を期すものである。

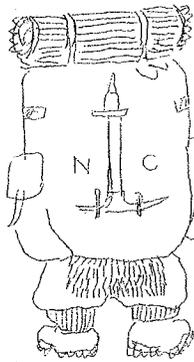
全体についてこの地味及小休止の際の敏捷を欠いた惨憺なる出発態度(殊に出発用意が云はれてからのザソクの整理など)等夏山の反省会に於いて上げられたい所である。

救急隊水川隊の絶大なる協力を謝し又無事で帰着し自己の責任を如何なく終着してくれた縦走隊員の勵志と反響に對して深く感謝する次第である。西高山岳部の発展を期して。

(一九五二年四月十五日 田中真)

評

C. L  
田中真利



私 も各リーターの林に結果を主眼と

して考察を進めて行こうと思つたが、決して察からの因の立場の追求にのみならず、いかにして「成功」である。勿論私は二の山行は自分の思う通りの果を生じな

テント内の暖房はローソクで充分である。一部アルコールバーナーと炭を使つたが息気やCOの過度の状態は皆用、重量の察から云つてアルコールや炭はローソクに劣る。外気マイナス八度以内はローソクで五度前後、炭で最前廿二度、十八度以上ではハキケを起す事もあり(人による)八度前後が最も良かった。毛布だけでもマイナス三度までは充分なられる。

ウエスリ整備法の欠陥から二日までは使用しなかつた。燃料はガソリン(四エチレン)有毒を使用したが別に悪へいは無かつた。

石油カンカマドは五ガロン入の石油カン(缶子ヤのもの)をカマドに改造して使用したが、炭の場合でもまさでも非常に便利であつた。

服装は野人じつらに足らぬと食部隊の引越と間違えられるが、我々びんぼう丹精物にとっては、かけがえのないマット名貴タミなのである。防寒と暖にはもつていのだが、停滞に對しては防寒性が全く欠けてしまつ事と重量とかが意外にあることである。その上スツシニがこの隙間に突さつて見づかきからぬことおびたしい。兵士の四月号ではベニヤ枚のマット代用法(花びニール防湿)が出ている部の器具係一見の要であらう。

ベツク木を枝を切つて雪中に水平にうめるのであるが察察での実験はうまく行かなかつたが、山上では網と共に氷化して定性は充分であつた。尚昨年二月の実験の際に雪干五六氷一廿米と一尺余の降雪でポールが雪中から裂件てしまつた。こゝろを雪中に居る者はシエラフに入つてみようものぢら身うち(き)一つ出来ぬ。まして灯台もある場合は、この様な隙の張網とベツクの

網の隙と共に竹製ストックの改造によるツバーク用ポールの研究も始めらるべきであらう。又夫悉自身としては出入口がスムーズに改良されたいものである。

アイゼン! 普通四本のもをを使用したか、水で充分向に合う。又八本のも



展望車

七して悪魔は必す口を吐く云々云々。 舟水は川は染しまんかために山へ行く」と。だからいせとなくと基礎を致されるので、自己の力の正視と自分に対する信と感謝の気持ちがなく、どこに真の楽しい山行があり得るか。

一泊の人間の「快楽が山に於いてなされる時、それ前ち「快楽」は同時に多くの他人（或は他動植物）の種々複雑な犠牲を意味する。それ等のものに対して、我々は、まあ感謝の念をささげねばならない。又同時に己も共同体（實際的パーティ行動に於いては）に対して全力をささぐべきであり、これは他から見た犠牲である。又同時に、自身では自己の犠牲を犠牲とは思はねど多くの人間に知らねばならぬと思ふ。此所の手段では唯に自己の利害にのみ気をとられてる人間は生かす得ないはずである。まず無我からの出発である。メンバーシップも限定的に此前に起す、又この無我も更に限定的には自己の力の正視と覚の上た立つものと云つて可い。

讀は合意の決定にもどるが、準備殊に準備中の研究会を導くものと主張した連中も今回ばかりとこの誤りさみせつけられたはずである。かかるに反省会たるや「人取次書」しか出来ていない。救済にわたる準備会研究会も決定に出来ぬ——平均二〜三人出席——旅のものが自己のみならず、自然を、染しみの本源である山行を正しく視、覚り、準備中の活動正しく評価し得ることには出来ぬ。尤も自己の正視なくして訓練やトレーニングも必要なく山行し得ると云う者が非常に多い。準備中の云々種類の動向が本人として、どのくらいかの位置（或は程度）にあるかは平沢の文によく出てくるが、こゝまうのこゝ一般には意味と云つのである。意味は、ある事件、事象に対する正視の開放させるドグマナズムに

○わがが十三貫しかないの下の人が百貫買つた事があるとあつては、可能に買得る体重もみる也」と云はれては除算も同定するわけにもゆかず、ハカリに交々乗つては細々と計算するうちに、一人だけどうしても、ハカリにのりたがらないのがいた。新の日の下、知る人ぞ知る一九貫。

○の原諒を待たて、……四十代のスチーヤ（婦人）口ぢらえに「買得たです」すでにウソはほどまった。N「あなた方は」「万座です」N「あせこはい、です」N「……ウソは白熱化した。婦人「梅田の下りてどのコースさ」N「胸まはつてせきほらい一番コト昔ながら北上します」……

○同じく婦人「今はどの丸い指鼻が流行つていますね」N「えー」車中の一人一せりに注目す。「こゝには鍋アタですよ」婦人「この水方一とおりにして」○満天の星を仰ぐの同食中、タンチフトの表裏代表、死んでま死なない板打通流ア、エマシ君、北七七星の一角をミランで、自家の奴はオレが今こんな所で飯を食つて居るがなと夢にも思つていないどうつてとホロリ。一同彼にも望

望の心ありやとニヤリとしたと云うウソめやうな嘘を食まじい本場の詩。○Cへの途中ラッセラーの、何のひまうしに驚愕。雪を喰つて居るのかと思えば、こは如何に、水筒の桶が頭を打つて雪の上に埋没せしめ、顔面は雪中深くあり、折にとんだソウナンも途であつた。雪中で生き死？

○の大昔話で重食と云う争になり、食野のK、ハツクの口をあげたとたん大型のゴツフェルがとびだした。おさえんとする間もあらはこそ、ゴツフェル氏の彼のキヤビブシとの音も軽やかに日川側へころは始めた。N「か丁が長うかアイゼンのため思う旅に走れず、長大な急斜面の危険となる。平行になつた下ま

まにアイゼンとせんとする所、ゴツフェルはタックルの下まきつて大きくバ

バ

するに大であることなるまなひ。無算(知)を我々は知らずには  
当らぬ。ただ無知を嫌慕すれば良いのである。我々自身が無知であるか  
らぬ。要は知見への努力である。行齋への科学性の要求である。即ち凡  
ゆる条件を正しく判する事によって自己の知るべきを果す絶えざる  
努力に他な<sup>ら</sup>ぬ。

今度の山行もこの重大な我々の高感スホーリキンの主体性を、すべ  
れてしまっているのではないか。まだ理解を成していないのであつたらば一  
緊急に研究会が必要である。これも燃焼してしまつてゐるはずだ。反省会  
は燃るとすべからず。五月の公式山行にも必ず失敗する。

計算が立てられたときからするに云つて来たメンバーシップを、再び  
「失敗」の評としてとりあげ、ひいては自己のパワーの論議にまで入つ  
てしまつたが、くどくももう一度言うならば、力の正視は、自己に對する  
赤裸々な心の結心が必要ならぬ。魂心とは、不理性の自我と  
虚構によつて必死以上に誇大されたアタマと、自然に對するはつきりと  
しつこい悔意を失つた不安定な肝で、經驗を經驗と取り得ないフラク<sup>ク</sup>の足  
とからなる超火災人的存在でないことである。火災人になつてしまつと  
一度後悔すると座に他人が転倒してゐる種に見える。立とうと思つても  
足のくせは、まことになほ切り切らぬ。自分の經驗から云つてゐること  
だからたしかだ。それでも君達が、僕の評するメンバーシップがわづら  
わ(ければ、又また安易な要求めんとするならば、僕は即ち動<sup>キ</sup>と  
燃を母とす。〔田五郎の看板を保育会に返上して、直ちに旅行  
会に取<sup>ル</sup>べし。〕

文化家を舞せられた山岳部だ。残つた現勢がたんでほつとするのか  
。他方本願が自分らでない。御此岸あつての彼岸だ。純心さに歸んだ自力

、ウインドして熊本の森林帯深く没していった。

の深層に個人は牛ノ根の分水嶺も自ら共に前夜の姿も懐かたかならず。全員  
激水ばかりに溺れて二歩一歩ラッセルしながら進歩。トツとラッセルの  
音が突然立ちこめて「熊だ」と云う。前の者はあたまを打つてとまる。前の  
方から皆熊だと言ふ。段上に立つている」と云う。少しは眼がわるいから暗ま  
すかして見てもわからぬ。はては「ナタを出すと云ひ出す者もある。しか  
し盛にしが「真直に進め」と云ひ、が全員一歩一歩小室川側につき出し、知ら  
ずく捲いて行く。面白い事に、右足するに従ひタマと熊がだんぐりと長くな  
り遂に一寸坊々までになつてしまつた。熊が安水れぬ悲劇であつた。

註)未だにNとSは熊であると云つてゐるし、熊のフンを見た者もあると云  
から全面的には否定しようとはしない。 N H K

のころのデント火事のときのこと、食付のN、すはやく見つけて「カジダレ  
とどかつてデントきた、きはじめた。同時に又少しが「全員起きろ」といなるが  
わえといふ当の住人がさつぱり起きるといひ、如何にと気がかへば出口にあ  
る後のスソをめぐつて出ようと試みている。ところがヤツがしつかり打つて  
あるたは頭を出ても肩が出ず、もがき続けるシウタイを凍ててしまつた。

これも又とんだソウナン系だ。絶死?

の氷川について一行、「失敗ソバ」のもと、駅に入つてゐる電車を乗るがし  
て幾々とソバ屋へ向つたが、「本日休業」。さび電車にと駅へ走つて、あと一  
歩、おどかりし。電報は一同まじりぬいで行つた。失敗の連続とい  
らだ、せるに余りある失敗であつた。

本願をなげればならぬ。現勢評言の座かに大我に立つて、まず空想界を考  
察するのを要求して、今山行の評のくくりとしたい。(注)





# 志賀スキー紀行

山口雄弘

湯田中からバスは皆打まで登ったが客が少いせいか、時間の具合がゆるく大分予定より遅れたので温泉を通ろうと考えていたが雪崩川せうたので丸池へまわる。二十ばかり積った新雪が靴の下でキタカハル秋よい。

くづついていた天気も五郎平茶屋から本格的に晴れて来た。丸池ヒュッテを通過してリフトを右手に見て登る。三日前に降った雨で全体でケレン系の状態は大分悪い。この辺りではスキーもさつける。大分静かの吸った志賀ヒュッテまで登る頃から吹雪は幾分弱まったが平床にかゝると瓦が強く当る。春の吹雪が大分静か狂う。十二時すぎに麓の湯へつく。

あくる日は快晴。午前中から横手山往復に出かける。相もかわらず「のまき」からの展望はすばらしい。徳美が巨岳の左の肩越しに遠光に光る千曲川が流れている。アルカスは雲の中。のまきから小屋からは山頂までカチカチに氷つていてシールもさかすスキーをかつかつかついで登る。

さすがは志賀高原だけあって春と云って木々の姿はよい。樹木がすばらしい。三角尖からは、根子、吾妻がすぐ右手に正面には浅間、そのうしろにかすかに富士がどの景色の姿を見せている。白根の噴煙も美しい。瓦が独りので長くも尾を引かず直ぐ下る。頂上から、のまき迄のアイスパーン

## 祝

三月七日に進行された廿六年度卒業式に於いて、我部オセ代(し)中野氏は、運動部中唯一人、文化賞を授けられた。

は手古する。エツチが一向にきかす一気に入米も減りこしまう。小屋まで廿分かつたが、のまきからは十五分下る。雪質が悪くて快適ではなかった。熊の湯はゆるくて入るに足らないが、静かである。またな

四日目は午前中から鉢山へ行く。のまきから小屋から横手の北側を少し捲き直に草津峠へ下る。林道踏走だが又特にギヤツプが多く雪が重いのでヒナのバネと脚のバネが疲弊された。途中から又吹雪いて来るとの上指直横草草津峠までは無いので大分時間かか、つたが鉢山からは木の向もよくなり指直横草に当たる。前山の上段では雪も止み、都合よく居る。想いもよらぬ景色の山々に今更ながら感激の産を放つ。今更に絶望していた雪も廿三日には三月の暴吹雪で気温も下り思ひかけぬ粉雪になった。

あくる廿四日は絶望の連続。午前中に君がスキーを折つて出立がおくれる。横手までの登りもいつもの空身ではなく荷が重いので大分苦しい。が昨日の降雪で頂上までシールがきいた。出る時は標頭だったのが頂上に立つと又吹雪いて来たがシールをはずして新装成った氷跡のスキー小屋まで秋首を五六分ほどはす。晝食をすませて、ゆるい登りをワックスをかきかして登る。

山田峠までは全部尾根越して天気は佳れれば迷う心配はないが吹雪の中、夜尾根に入り込んで指直横草探すのに一苦労する。此山脈は又晴天に恵まれ横手の横ゆりから正面に輝き白根の噴煙も大分近い。峠の切りは漆烏地帯で枯死した木が美味わるくニョキ／＼と立って居る。峠からは右手の沢と林間道を走れる。雪も良いのでスキーも気持ちよく廻る。砲撃の音勾ひが静か、ついでには万葉の屋根が見え、今日半日のツチノシロ終り三十分には見

に入ることが出来た。梯盤登では客が我々三人だけなので本意旅館が馬鹿に淋しかった。この湯は猛烈にあついたので入る前にヒキケで入奮闘しないとい入れないが静かな湯感のりたる山の湯である。夜更けてランチの光で風呂に入る頃には、又しても、気味の悪い音を立て、吹雪いて来た。更に気狂いどみた春の雪である。

朝になつても吹雪はますます強く降りかかるばかりであった。梯盤を着たが、この死んだ様な静かな旅館にいるのも退屈打のひなることにする。丁度山田温泉へ下る番頭が居たので案内されたのである。外へ出ると思つたよりもすこい強風だ。自分のつけたシューズが気味のわるい程サツと滑って行く。春の山と思つて油断した、ゆ毛袋とヤッケとの間の服が鼻先に打つてしまつたが代りもないのである。どうし林はない。刀本峠は三十分。シールをはずす手も自由に動かない。峠の雪底を履き歩むには尻に飛ぶ程に何回も誤つた。峠を越すと尻が真正面に吹きつける。まつばに氷がついて尻から氷が出て前が見えない。いわゆる二十九曲りはスキーを折つては一大事と慎重にキックターンを繰り返す。峠を越すと少し下の小屋につくが雪がつかうすより内のはあそこ人と力を合せて、やっと半分ばかりこぢおける。火にあたつて人も熱がした頃、こみからが難所だと云はれてヤッコとする。せこからは水面から三〇米位の所に二時間はかり斜降定の連続。その上新雪の層を登るからので一層の緊張を解けない。つい最近に遭難者が出たと云う二十坪の難所も無事に通過し、夫れの日三時の時間までかけて七時過ぎたつく。やつと重荷をどかしてみるに猛烈に腹がへる。着て見ると山田に遭難したつくつと静かに持たずに出たからだ。上味を食べたかつたがもう一息ある山田までとぼすことにした。七時過ぎの小屋を乗り出して嵐の辺のバス道を通る。やはり

十米位の崖なので気が許せない。だんだん傾斜はゆるく、おろくスキーが滑らなないので五色温泉でワックスをぬりかえる。

天気が雪で半かしか雨かない戸から家の内へスキーを引いてフトフトと出て来る。雪は積つたが凡そ来た後。同じ道を通る今度滑るスキーで十五分山田温泉につく。

三人共どうやら向に合つた最後のバスに乗る気もなく「今日は山田温泉」とさめこんで旅館に上りこんだ。山田温泉の共同浴場へ行つて見ると近在のお百姓さんが大勢来ていたが九割まで浴場から後を落して居るのを見て二人に「おい、この湯はハケる湯だわねえだろうな」と云つて鬼の手頭を手をやつた。

こゝも又人柄の差が分かれる温泉場である。最後は道順が更であつたが野次入行く、もう更が下ると春なので雪が厚く一日居て温泉する。ついでに開放しておくがスキー場の温泉町では野次が一番である。

# たわごと

平澤 勇

新人・現役のため

今なら私にせうとする番には、至極当り前の事として取り扱はれている事だのさういふ時、理解して貰けると思ひます。そしてこれと理解出来ないとして私の素直ではなくて、むしろ真実自身の純心々の向極なのです。今更此の縁を文をきかぬは口をいふと云う事は、如何にも愚痴らしいと思はれるかも知れませんが、ところが我々の多くは、この一見愚痴らしいと思はれることを黙れているのです。



二十六年度山行総覧

鉦尾根

期日 四月五日

パーティ 丁内 日下

コース 登野―鉦尾根―天世山―大タワ

峠―小笠浦

川寄山・市道山

期日 四月八日 曇

パーティ 村田博之 他一名

コース 水郷―川寄山―市道山 杜田峠―

藤野殿

川苔山

期日 四月九日

パーティ 田中実

コース 川苔谷出合―百尋滝―横ヶ谷小屋

跡―川苔山―舟井戸―榎沢

戸倉三山―陣馬山

期日 四月八日

パーティ 長崎 笹田

コース 倉橋―伝巻沢―石汐沢―尾根―

川寄山頂―金塊沢―イツホテ山―

陣馬山頂―明毛峠―耳瀬

35回

川苔山集中登山 川村田

期日 四月二十二日

① 川苔谷林道

パーティ シ中野 南谷 姫富田

コース 川苔谷出合―百ヒロの巻―

横ヶ谷―川苔山

② 直名井沢

パーティ 山森沢 岩堀 林 姫神島

コース 川名駅―直名井沢出合―魚

止の巻―二岐―赤尾根―

川苔山

③ 曲ヶ谷沢

パーティ 鈴木 佐藤 平次(部)

コース 川井―大坪波―曲ヶ谷沢―

川苔山

④ 入川谷

パーティ シ田中実 山田 福田

コース 古里―魚止巻―徑に出る―

舟井戸―川苔山

⑤ カロロ

パーティ シ笹田 長崎 加藤

コース 大塚―日原 日原ヒユツテ泊

―カヒロ出合―仙元峠―ソ

バツツ山―川苔山

◎ 痛路

パーティ 村田 野口 戸田

コース 古里―伝巻沢の頭―川苔山

コース 川苔山―舟井戸―大根の山の

神―鳩の巻

鋸・大岳・御岳・縦走

期日 五月三日 晴時々曇

パーティ 佐藤 他二名

コース 氷川―舟大橋―大タワ―大

岳―御岳―御蔵

36回 茅倉尾根

期日 五月十三日

パーティ シ林 下出 戸田 斎藤 川村

コース 御蔵―御岳神社―大岳小屋

―ツツラ岩―馬頭山―十里

木―五日市

37回 水無川本谷

期日 六月十七日

パーティ シ加藤 笹田 平次

コース 遊沢―大倉―本谷―塔ヶ岳

―大倉

38回 水無川本谷

期日 六月二十四日

バーチ 山口 長崎 田中 岩塚 河合 下

出 関谷 香藤

コース 遊歩—大倉—本谷 塔ヶ岳—大倉

### 谷川岳西照沢

期日 六月十七日 晴後雨後晴

バーチ 鈴木 田中東

コース 土合—山の家—洞沢出合—尾根

—氷上山—ザンゲ岩—翁オキの

耳—肩の小屋—天ヶ岩—尻出し

岩—天神峠—天神小屋—谷川温

泉—水上

### 39回 奥秩父主脈縦走

#### ① 縦走班

期日 七月十四—十九日

バーチ 山田中東 SL佐藤信治 SL平塚勇 M

山口雄弘 笹田英次 森永花治 上崎

止鷗 北藤登夫 岩塚中三 河合義敏

佐藤亮弘 林武志 福田宏二郎

コース 期日 信濃川上—信州峠—黒森—

金山—就寝

オ二日 富き見—六日岩—五丈

岩—朝日岳—大池小屋泊

オ三日 雨後晴—北嶺全丈—国師—甲武

信—小屋

オ四日 晴—経平—破丸—雁坂峠—

雁峠—將監峠—將監小屋

(小屋にて柳沢班と合流)

オ五日 晴—大タルミ—春岩—雲取

小屋跡

オ六日 晴—雲取山頂—掬坂—セツ

石—三木戸山の肩—氷川

#### ② 柳沢班

期日 七月十七日—十九日

バーチ 山村野 野口 泰下

出 関谷 戸田 香藤

コース 塩山—番屋—柳沢峠—

葉合—一之瀬—將監小屋

オ二日 大タルミ—亮岩—雲

取小屋泊

オ三日 雲取山頂—セツ石—氷

川

#### ③ 菅林署の天

期日

バーチ 田中將利 長崎

コース 三雲沢出合—源流—縦走

路—甲武信雲—甲武信小

屋 以後縦走像と合流

田中將利 森沢 以上二名は雲取小屋より柳沢峠を経て塩山に下る

### 40回 ハケ岳主脈縦走

期日 八月三日—四日

バーチ 山岩嶺 河合 下出 関谷

コース 小淵沢—鴉山—権理—加

大キレット小屋泊—中岳—赤

岳—猿黄小屋—猿黄岳—夏

沢峠—本木温泉—松原湖駅

### 雲取山—將監峠

期日 八月三日—七日

バーチ 林 他八名

コース 氷川—鴨沢—セツ石小屋泊—

雲取山—娘平—大タルミ小屋

泊—將監峠小屋—三之瀬—

岩合—丹波泊—氷川

### 大菩薩嶺

期日 八月十三日—十四日

バーチ 名倉

コース 塩山—上日川峠—小屋泊—

石丸峠—大菩薩嶺—初鹿峠—

### タル沢

期日 八月二十日 雨後曇

バーチ 田中東 佐藤 佐野

コース 氷川—大峠—タル沢小屋—

一 支流出合ー六ツ石ー氷川

### 大黒茂谷下降

期日 八月二十六ー二十八日

パーティ 平沢勇 長崎正繁

コース 氷川ー三糸橋ー小室川谷ー十丈

宇峠ー大菩薩嶺ー大黒茂谷最低鞍

部ー伏流ー停止設置(道)ー泉水

谷出合ー泉水小屋ー丸川峠ー塔

合ー塩山

### 41回 塔ヶ岳集中登山 C.L 加藤

期日 九月二十二日ー二十四日

#### ① 勘七次

パーティ L 岩堀 窪田 肉谷 下出

#### ② 水無川

パーティ L 福田 田中 島田 鈴木 林

#### ③ 源次郎次

パーティ L 加藤 平沢 田中 飯塚

河村

コース 塔ヶ岳にて三パーティ合流ー並行小

屋泊(岩堀 窪田 平沢 田中)

河村は大倉尾根を下降ー丹沢

山ー蛭ヶ岳ー焼山ー五瀬

### 小佛峠

期日 九月二十四日

パーティ L 肉谷 田中 平沢 林 下出

加藤

コース 五瀬ー小佛峠ー鷹山ー浅

川

### 三尾根から鍋割尾根

期日 八月十九日 十九日

パーティ 岩堀

コース 菩提ー三本松ー二塔ー塔

鍋割山ーミツヒ天出合ー勘七

### 42回 ツヅラ岩

期日

パーティ L 平沢 笹田

コース 五日市ー本宿ー千足次

茅倉橋ーツヅラ岩ー富

士見合ー千足

### 43回 大菩薩嶺

期日 十月十三日ー二十四日

パーティ L 加藤 S.L 岩堀 林 篠藤

泰福田 下出 戸田 肉谷

齋藤

コース 氷川ー丹波ー三條小屋

小室川出合ー大黒茂谷

一 泉水谷造林小屋(道)ー十文字峠

一 丸川峠ー大菩薩嶺ー大菩薩峠

一 上日川峠ー番屋ー塩山

### 十文字峠より金峰山

期日 十月二十三日ー二十六日

パーティ 中野 鈴木 田中

コース 信濃川上ー梓山ー八丁坂

才一日 信濃川上ー梓山ー八丁坂

才二日 大山遊道ー大山ー三室山

田武信岳ー竈見ー石塔尾根

入口ー西天入口ー国郎岳

大蛇小屋(道)

才三日 朝見岳ー金峯山ー片手道

塩山分岐ー水龍峠ー一本松林

場ー上野平ー白岳ー天神林

才四日 バス 甲府

### 三頭山

期日 十月二十二日

パーティ 岩堀

コース 河内ー教養峠 西峰ー教養峠

御前山ー氷川山庄泊

### 越次 (才一次偵察)

期日 十月二十五日

○山行総覧につづく。

### 川苔桂谷

期日 十月二十四日

パーティ 園中

コース 米川→川苔本谷→桂谷→益地谷

川苔山→鳩ノ巣

### 武甲山

期日 十一月三日

パーティ 河合他

### 三ツ峠

期日 十一月三日

パーティ 鈴木他 (ハレト部ハイキング)

### 越沢バツトレス

期日 十一月四日

パーティ 田中向、平沢

コース 越沢→琴平山→西壁→大塚山→バツトレス→鳩ノ巣

### 陣馬山

期日 十一月二十三日

パーティ 佐藤他二名

### 海沢

期日 十一月二十六日

パーティ 下出、戸田、福田、福田、旭多敷

### 火打石谷

期日 十一月二十三日

パーティ 田中向、平沢、河合、林

コース 米川→火打石谷→川苔山→鳩ノ巣

### 御前山

期日 十二月二十八日

パーティ 福田

コース 御岳→大森→繪巻山→藤堂→米川

### 牛ノ根偵察

(A) 期日 十二月二十三、二十四日

パーティ 上岩塚、鈴木、南谷、斎藤

コース 塩山→菅原→大菩薩峠→石丸峠

牛ノ根→大マドイム→小管村→米川

(B)

期日 十二月二十三、四日

パーティ 上笹田、原孫、松崎

### 鋸尾根

期日 十二月二十四日

パーティ 田中向、平沢

### 五色スキー

期日 一月

パーティ 川合他

### 44回 七ツ石山

期日 一月六日、八日

パーティ C、加藤、北平沢、笹田、佐藤他

河口、飯塚、川村、林

コース 米川→原田→鷹塚→堂所峠→七ツ石山→鷹沢

### 逆川谷

期日 一月二十五日

パーティ 田中向、平沢、田中向

### 45回 川苔山

期日 二月三日

パーティ C、福田、北平沢他、北園倉、田中向

森、戸田、早良、斎藤、下出

### 赤杭尾根

期日 二月十七日

パーティ 福田、下出

### 46回 多摩南陵

期日・パーティ 報告は省略します。

### 訂正

川苔桂谷及び三ツ峠は参加者、都度外のみなさんをもつて、ここに訂正す。

# 踏 跡

昭和廿六年度

我部は御存知の通り昭和廿二年九月体育会山岳部として認められた。他校山岳部に比してや、古い歴史を有しながら、部の基礎の確立が一ヶ月ないし二年おれてしまった。これは一つに校内に対するスポーツとばかりに熱心な発展の気志のみで専ら世に華は確かであるが部の内部一般としての働きかけを行ななかつたことにある。此所には救に於いて廿六年度を正しては、まことにバラバラであった。廿五年度が山行回

## 第一表 月別山行記録 (一九四九〜一九五一年)

月	山行回数 (公式山行)		山行延日数		参加人員 (部員)		部員係者 (〇月)		一般生徒 (印刷部)	
	廿四年	廿五年	廿四年	廿五年	廿四年	廿五年	廿四年	廿五年	廿四年	廿五年
四月	〇	七	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五月	一	五	一	六	七	七	〇	〇	〇	〇
六月	〇	一	〇	三	〇	三	〇	〇	〇	〇
七月	一	六	八	二	〇	一	〇	〇	〇	〇
八月	五	一	一	七	一	〇	〇	〇	〇	〇
九月	〇	三	〇	六	〇	九	〇	〇	〇	〇
十月	一	三	一	五	〇	二	〇	〇	〇	〇
十一月	〇	三	〇	五	〇	七	〇	〇	〇	〇
十二月	〇	四	〇	三	〇	九	〇	〇	〇	〇
一月	〇	四	〇	六	〇	八	〇	〇	〇	〇
二月	二	三	五	二	七	一	〇	〇	〇	〇
三月	〇	三	五	二	〇	一	〇	〇	〇	〇
合計	一	五	五	九	三	一	三	三	一	一

参加人員 (部員) 部員係者 (〇月) 一般生徒 (印刷部)

(廿二頁より〜) 以上とりとめもなく書きましたが、この夕子はひり五つ無知の朝尚ほ我々一度は藤(未)にのびます。そして後に残る現役の人達に深し(二)度と驚くり返させたくはないのです。

お互に無知から相への懸やくに努力したいものです。

(又) 登壇 田中



山行記録表 四一 公式一三  
 山行延日数 一八三 一六  
 (部員) 一人  
 一人平均前六三回 約十三日  
 公式山行一回 約九人  
 一人 約四回  
 部員総計二十ヶ月平均廿九人とする  
 教師参加 皆無 概し

物名	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年	十八年	十九年	二十年
二三天城主殿	六	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二四雲取山	〇	一	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二五御前山	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二六龍徳山	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二七眞珠父主殿	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二八河吹川東次	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二九檜・燕 岳	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三〇尾瀬沼	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三一富士山	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三二甲武信岳	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三三愛取山	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三四丹次主殿	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三五川登山集中	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三六大岳山	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三七水鏡川本次	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三八ッ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三九眞珠父主殿	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四〇八ッ岳	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四一塔・赤雲中	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四二葦倉のつら岩	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四三辰小大菩薩嶺	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
債・大菩薩その他	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四四七ッ石山	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四五川登山	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四六琴川南分水院七	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四七長沢寺院	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

以上廿五年度  
 (七七五三三五)

なつてゐる。これは公式山行のとり方の変更を止めしてゐることであり、申し出ていた山行を公式として気の合うもの同様の山行とした廿五年度は、その結果として小人数パーティをモットーとする<sup>又各</sup>ことによつて自スルーを形成することによつて部員内の結合は勿論、各公式山行間の連絡及科学性は全く失はれてゐた。これに反して廿六年度は全部員とまで行かなくとも部の中望望のものしつかりした融合努力が部内統一の面がこの部員の中にもはつきりとうかがえる。山行の対称となつてゐる山かいかの小さいものであつても、部の團結こそ自他に誇りうべきものである。この部員の融結を顧りみると、この後者の統一気風が出たのが廿五九月であつた。幸ながら、廿六年四月山行中によつて部員の一足が踏み出された。これは村西の部員の技巧と四ヶ年間にもわたる研究が最も出した技巧と云える。これによつて眞珠父主殿が基礎づけられた。その後、伯人節に勝手な行動をするものが出る。二つは誠にはいふのであるが、今作製されてゐる山行経路をラフによれば、右の如き統一をみだす後を行爲に出る虞が不慮に共通事業を多分に有してゐることがかつたが、今のところ研究不足と、伯人の見解によつて相違の差異もあるのが発表出来ない。今後部の方針決定に重要な役割をもつ研究であると思つた。たゞ今までの出した結果の一例を見ると、部の方針の重要性に気がつくのは入部以來一ヶ月、一年半を経たもので、且つ山行日数、勿論、くわしい分析を要するが、三〇〇三三三三以上のもので云ふことになる。これを方針を誤つた廿五年の如く、Sは全員に当てはめることも可能であり、又一度方針を誤つた場合は、その影響が部に最大限に及ぶと云ふことも又明らかである。以上の如く、Sの提出は殊に重大な事となる。と同時に今までの提出案の考慮がはらわれぬばならぬ。團結と云ふ意味に於いてこのことは山行ばかりでなく、あまりにも重要であると思つた。池田によつては人数山行は本輪であることと云ふところもあるが、たしかに人数は團體で

表四 登山行日数ベスト20 (1950. 51年比較)

昭和廿五年年度			昭和廿六年年度				
氏名	回数	日数	氏名	回数	日数		
1 岡田博之	2	10	21	甲沢 勇	3	14	23
2 村西博之	2	8	20	田中 実	3	11	22
3 田中 実	2	9	19	加藤 鈴夫	2	9	22
4 鈴木 隆夫	2	10	17	笹田 英次	3	10	21
5 長崎 正昭	2	7	17	林 武志	1	9	21
6 森沢 拓治	2	7	16	岡谷 敏	1	10	21
7 谷 河次	2	6	16	橋田 幸郎	1	10	20
8 佐藤 隆吉	2	7	15	岩瀬 幸三	2	10	19
9 謝野 一朗	3	7	13	山口 雄弘	3	5	19
10 山口 雄弘	2	4	12	下出 鶴彦	1	10	18
11 藤原 可	2	7	12	中 崎 美 可	3	5	16
12 山崎 大	1	5	9	長崎 正昭	3	7	15
13 沢 武	2	3	9	青 藤 悠 弘	1	7	14
14 村内 章	2	2	8	佐 藤 充 弘	2	5	11
15 菅野 幸一	3	4	8	坂 合 充	2	5	11
16 坂本 一郎	2	3	8	戸 田 清	1	7	10
17 岩瀬 幸三	1	4	8	佐藤 信治	3	4	9
18 石橋 隆夫	2	2	6	森 沢 拓 治	3	4	9
19 藤原 文二	2	2	3	川 原 敏 中	1	4	3
20 村西 博之	3	2	4	(田中 初夫)	1	3	14
				(鈴木 初夫)	3	8	14

表五 目的地別山行回数

目的地名	回数	日数	入籍
1 奥秩父方面	4	19	27
2 奥武蔵方面	16	19	71
3 大菩薩方面	5	13	30
4 丹 沢方面	4	6	27
5 入 岳方面	1	2	4
6 谷川岳方面	1	1	1
7 上越 方面	2	12	2
8 奥武蔵方面	1	1	1
9 中央 沿線	4	4	9

表六 高歩別山行回数

3000m以上	1回
2500 "	3
2000 "	7
1500 "	6
1000 "	27
1000 以下	8

表七 山行日数別延人数

日帰り	27回	175人
二日以上	16回	62人
五日以上	1回	12人

表八 費用別山行回数

(食費、キセルは考慮せず)	
200円以下	18回
200円以上	25回
500円以上	1回
1000円以上	1回

(基 京西 杖 笠 と し て)

ここ二歩一歩強く  
踏みだす年だ。常  
に踏破をめする  
ことなう。  
(M.T.)

表三 目的地別山行回数

冬山を主とするもの



延 22人  
3回

スキーを主とするもの



延 2人  
2回

縦走を主とするもの



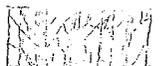
延 73人  
21回

沢尻岩登りを主とするもの



延 54人  
17回

その他



延 20人  
10回

あるが、基礎期間である我々の山行では、部員各自パーティシツプを充分に与えな  
なくてはならぬ。即ち部員力、二車以上給いでスムーズに行く山行はない。山行日数の  
方は、前年度に出した方が他校の方が十位多いが、出ていって小人数の傾向は不明でない  
のが残念だ。中堅一車一車の日数が増加し十回までのが中心ですれば、だいたひ部  
の力はかたひ。今までは日補給が我部としては限定的であったが今年あたり四十日  
くらいに終着する可能性が有り、この山行は白人主用することは否々に困難さとも  
なうが、あくまでも全体的の数をとして価値がある。戦後の都合上詳細の説明は、  
はびくが傾向はいつてもうける。廿六年年度の報告は完成した。廿七年度一今年

まことに豫然としておさえたことは事実であるが、我部では夏山と之満足に出来たことはないのがある。今さら大ニ訓をうらんでもしようがないが、中略にこの板が運動部がない上に、白紙のまゝ二年になると、もう危うかしい部の運営の責任を小さく背に背けぬばならぬ。やうと部の向懸がわかり真剣になる場合は、もうオールド・ボーイズの仲間として扱われる。それでは三年くらいしほられたとして、とて一人まゝにはおられない。火のたき方―基礎があるが―ささえて十年はかゝると云はれているのだ。高橋氏ではないが卒業してもオールド・ボスではなくフレッシユボーイなのである。それでは今までの経験とせの経験を拵つている。それではよりいまだまわりの現役公衆(二年)に全て与へてやる事がなければならぬ。この板にして来たのがNAC(のB有志会)であつた筈である。

〇〇Bの指導と向懸に又、現役は若々しさがなければならぬ。若さ、精気のよい青年はばならない。若さには、まず謙虚と云ふものがつきものであることば今更云うまでもないことである。主体は、あくまで現役であるのだから、邊少御座することなく、邊少御座することなく、常にスミ標の自己をかみかめるべきである。常に「謙己き新人の気持ちにすること、純心であること。これは「謙己き」ではない。自己に對しての正規の意味するのである。これだけは忘れこもらいたくないものだ。いつても若々しいフレッシユボーイでありたい。

〇駄文ながら部の前途―今年こそ部の基礎の完成と思う―を祝して、又編集員の一人として、新人のBとして后記にかえたいと思う。

(田中)

〇山岳部廿五年年度卒業のOB藤和彦三氏(一九三〇)は、四月末日死去されました。此所に深く哀悼の意を表す次第であります。尚告別式にはOBより菅野幸夫氏、現役よりくし加藤敏夫君が参列致しました。

今年も、いや今年こそ、若々しくがんばろう。

として

バルクハイル

告、卒業生の皆様へ、NACは一但の山岳会としてばかりでなく、西高卒業生有志の団体でありますので、そのオ一の目標を西高山岳部の積極的指導と致します。〇〇、新しく同志を募つております。連絡は、田中へ、会長表加藤敏夫

部報 彷徨 第九号

昭和廿七年五月廿日 発行 一非志 岳一

発行責任者 加藤 鈴天

編集責任者 斎藤 忠正

印刷責任者 林 武志

岡谷 徹

田中 将和

発行所 東京都杉並区大宮前三ノ二八

都立 西高 山岳部

人間の態力は生れつきでは弱い。人間につけられた味  
である。

野菜につけられた味のよさは百姓の腕次第、味となる  
べき肥料をやらぬは味はつかず、やるべき時期を~~誤~~誤つて  
はよい味はつかぬ。

(鈴木煥「才能は生れつきにあらざり」)